

60359

教科書文庫

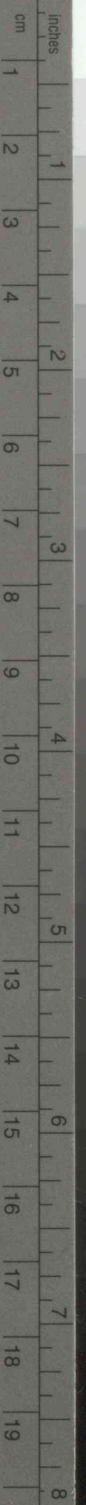
6
810
45-1949
01304 49691

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫  
6  
810  
45-1949  
0130449691

謹  
教育文化研究会編

文部省檢定済教科書

PKC  
Ky6

# 國語

中  
第二学年用校

一

教育學部  
資料室



教育図書株式会社



昭和二十四年十月十日  
文部省檢定済  
中学校國語科用

教科書文庫  
6  
810  
45-1949  
0130449691

中央図書館

# 國語

中  
学  
第  
二  
学  
年  
用  
校  
一

広島大学図書

0130449691



教育図書株式会社

広島大学  
教育学部図書

広島大学図書

0130449691



目次

一 太陽と春	福田正夫	一
二 美しい世界		
一、比叡の鳥	高浜虚子	三
二、旅の子アダム	ヴァイニング	五
三 光を求めて		
一、私の生活	ヘレンケラー	一九
二、日 光	北原白秋	三〇
四 た き 火	志賀直哉	三三
五 文章について	谷崎潤一郎	四〇
六 新聞とラジオ		
一、新聞のできるまで	影山三郎	五〇
二、放送とマイクロフォン	鈴木博	五七
七 自然とともに		
一、し み す	萩原井泉水	六三
二、海	島崎藤村	六六

一 太陽と春

福田正夫

福田正夫は、明治二十六年（一八九三）神奈川県  
で生まれた。詩人。著書には、「即興即吟」・「暴  
風雨の虹」などの詩集がある。

柔らかい風が、  
輝いた海洋から地上にのぼる。  
光っている畑、  
光っている木、  
光っている葉、  
一つ／＼がみんな春の呼吸。

緑の春は、  
楽しげに揺らぎ、  
よろこばしさに揺らぎ、  
「生きてる、生きてる。」と光の中でささやく。

一 太陽と春



黒い土がその下に燃えながら、  
黙って光を吸う。

萌えたつ春の碧みどりの空、  
忍んだ冬の寒い憂鬱うれから、  
南の國の春は解放される。  
枯れ草の間の小さな草の葉、  
葉の色、だいこんの色、  
ふかくとこめた太陽の愛、  
溶けるような和らいだ空氣。

しま、  
道をゆるやかに行く農夫、  
その手が光る、  
その鍬が光る。  
輝いた地上の光に、  
溶けてゆく愛の世界の春。

(「現代詩人全集」第十一卷による)



【学習の手引】

- (1) この詩の味がよく出るように、朗読のしかたをくふうする。
- (2) この詩の情景について話しあう。
- (3) 次のことばの意味を調べて発表する。  
イ、一つ／＼がみんな春の呼吸。  
ロ、「生きてる、生きてる。」と光の中でささやく。
- (4) 春の詩をもっと読んでみる。
- (5) 春に取材して、詩を作って発表しあう。

二 美しい世界

この課は、高浜たかま虚子まこの「比叡へいの鳥」とヴァイニングの「旅の子アダム」とから成り立っている。美しい世界が、それ／＼どのように表わされているかを読みとろう。

一、比叡の鳥

高浜虚子、本名は清きよ。俳人。明治七年（一八七四）愛媛えひま縣で生まれた。著書には、「高浜虚子全集」があり、小説・隨筆・紀行・評論の全部が収められている。

高 浜 虚 子

比叡  
比叡山の略  
称。京都府  
と滋賀縣と  
の境にある  
山。

寢床を出て、ようじをつかいながら、湖水の見えるへやに行ってみる。

朝日がへや一面にはいつている。湖水と思われるあたりは雲ばかりで、何も見えぬ。富士の頂上から雲海を見おろしたのと似たけしきだ。へやの下は東谷になってるので、わが目より、やゝ高く、やゝ低く、無数のすぎのこずえが、鋒さきのようにつつ立っている。左手には、北谷の向こうにあたる峰が、のこぎりの齒はのようなすぎを背に並べて、湖の方に流れている。空気が清いうえにも清いので、近景のすぎのこずえも、遠景のすぎの森も、新鮮な色をしている。そうして、その間を、薄いかすみうすみが流れている。ひじょうに静かだ。自分の呼吸のほか、浮き世のものおとは何も聞えぬ。

たゞこの天地をわがもの顔に鳴きさえずっているのは、小鳥だ。なんというかわいい声であろう。名がわからないのが残念だ。そのすぎのこずえで一羽鳴いている。あそこのすぎのこずえで他の一羽が答えている。またはるか向こうの谷深く、他の一羽が應じている。よく耳をすますと、なほ二、三羽の声がどこかで聞えるようだ。またその小鳥の合奏を破るように、他の声の小鳥が、とつぜんその間に高音をはる。前の小鳥ほどやさしい声ではないが、またりしいところがあって、その音の空山に響く趣がなんともいえぬ。これも名のわからぬのが残念だ。それも一羽ではない。三羽、四羽と聞くうちに、だん／＼ふえてくる。前の小鳥が縦糸なら、この小鳥は横糸のように、互に錯綜さくそうして、よく調和を保つところがちもしろい。とつぜんけん／＼とけた、ましい音が谷を横ぎる。こなたの谷にも響けば、こなたの峰にも響く。きのう聞いたきじの声よりも、やゝ急調だ。たぶん山鳥でもあろうか。前の二つの小鳥で織り成した美しい絹を、たゞ一声で引き裂いたかと疑われる。

しばらくして、その声は谷の底の底、峰の奥の奥にしみ込んでしまつて、そのあとは元のとおり静

かになる。まっさきにその静けさを破るものはうぐいすの声だ。絹に置かれたかすりのように美しい。一つのかすりが置かれると、また縦糸を織つて、前の小鳥が鳴く。また横糸を織つて、次の小鳥が鳴く。かすりが鳴く。縦糸が鳴く。横糸が鳴く。この美しい絹を、また山鳥の声が破るのかと思ひながら、待ち設けていると、ふしぎな声が別に起る。それはふもとの里の池で聞くかえるの声によく似ていて、谷の寺院のわに口が口をあけてつぶやくのかとも疑われる。他の鳥の声々がみな高調で、晴れ／＼とした中に、ひとり低調で、不平らしい音を出すのがおもしろい。友は「きつつきだろ。」と言ひ、他の者は「山ばとだろ。」と言つた。

琵琶湖の上には、まだ漠々とした白雲が漂うている。すぎのこずえを流れるかすみは、少しづつ薄らいできて、だん／＼と谷が深く見えてくる。

(「叡山詣」による)

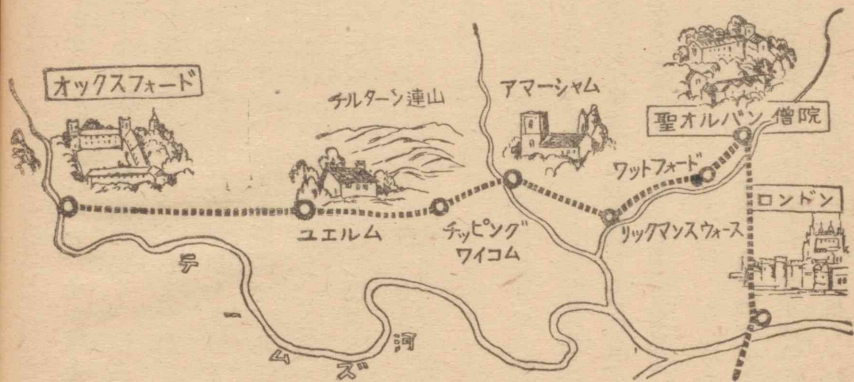
琵琶湖  
滋賀縣にあ  
る日本最大  
の湖。風光  
の美しい。名  
高い。

## 二、旅の子アダム

ヴァイニング

ヴァイニング (Elizabeth Gray Vining) は、一九〇二年アメリカで生まれた。教育家。児童文学者。一九四六年來日し、皇太子の教育係をしている。著者には「若きウォルター・スコット」・「ウィリアム・ペン」・「旅の子アダム」・「サンデイ」などがある。

この文は、ヴァイニングの「旅の子アダム」という長い物語の二節である。この物語は、ひとりの少年と犬、そしてその冒険の話である。少年は吟遊詩人のむすこで、十三世紀のイギリスの道々をさまよひ歩いた。少年は、城でも、屋敷でも、また百姓の小屋でも歓迎されたので、この時代のあらゆる生活を経験した。



十三世紀は、イギリスでは、今日私たちがたいせつに思う自由についてのいろいろの主義主張がめばえはじめた時代であり、また人々は自然に親しみ、その美を楽しんでいた時代である。

作者は、「この話はひとりの少年の誠実と、父を尋ねての旅の単純な物語ですが、これをおして私は、すべての國々、すべての時代にあてはまる人生の眞理を語ろうとしたのであります。」と言っている。

アダムは、聖オルバン僧院の中の学校で、彼をこゝに預けてフランスに旅だつた吟遊詩人の父ロージャーを、なかよしのパーキンといっしょに暮らしながら、心待ちに待っていた。やがて父ロージャーは、アダムの所に帰つて来て、アダムを連れてふたゝび吟詠の旅に出た。途中で少年は父を見失ひ、いろいろな苦勞を続けながら、父を求めてさまよつた。人々は皆しんせつであつた。ようやく、ユエルムにあるパーキンの家にたどり着き、この文にあるような生活をして、最後にオックスフォードで、なつかしい父ロージャーに会うのである。少年アダムの誠実な心、イギリスの自然の美しさ、いろいろの人々の心の美しさを、よく味わつてみよう。

アダムが丘を降りてユエルムにさしかると、ちょうど村人たちが夕べの祈りにと、四角な塔のある石造りの小さな教会堂へ列になつてはいつて行くところだつたから、アダムもいちばんおもしろい人について中にはいつた。みんなが禮拜に行つていたのでつたら、今あの農夫の家を尋ねて歩いてもむだだと思つたのである。



小さな教会堂は寒くて薄暗かつた。あかりといえば祭壇にろうそくがともっているばかりで、石の床はアダムの足には道路よりも冷たいとさえ感じられた。こゝちわるそうにからだの重みを痛い足に代わる代わるかけて、会衆の後に立っていた。

とつぜん会衆の間にもよつとした動きを感じたが、すぐそのあとでだれかが自分のひじをそつと突いたような気がしたので、アダムはふり返つて見た。あつ、パーキン、お祈りのまつ最中に、歓声をあげるところだつた。

パーキンはあい変わらずすんなりして浅黒く、背はまっすぐで、澄んだ茶色の目をして、まじめくさつた微笑を浮かべている。驚いたことに、アダムはもうパーキンの顔を見上げないでも済んだ。というのは、今はパーキンの顔とアダムの顔とが同じ高さになつているからである。この八、九箇月の間に自分ながら大きくなつたことがはじめてわかつた。

聖オルバン学校にいたころよくやつたように、アダムはパーキンの腕をぎゅつと握り、パーキンはアダムの背中を抱きしめた。祝禱のためにひざまずいた時、パーキンはもたれかゝるようにしてアダ

ムの耳にさゝやいた。

「ニックはぼくんとここにあずかっているよ。」

夕べの祈りが終ると、ふたりはいち早く教会堂を出た。びゅうつと飛ぶように墓地を走り抜けた。低い壁を飛び越えたりしながら、近道をしてバーキンの家に着いた。

「ニック。」と、アダムは呼んだ。「ニック、行くぞ。」

キャンキャンと喜ぶ声が答えてきたと思うまに、早くも犬と少年とはふたゝびいっしょになったのであった。アダムは暖かい絹のような胸体を抱きしめようとするが、ニックはぐりぐり／＼とからだをくねらせる、突き進む、飛び上がる。今アダムの顔じゅうくまなくなめまわすかと思えば、次にはアダムの胸にふさ／＼した大きな前足をびたつと載せる。また、その次にはからだをぐる／＼とひねって、ちぎれるばかりに振るしつぽの右に左にまっかな舌がだらりとたれる。つないであつた綱を解いてやると、ニックは大喜びでキャンキャン鳴きながら庭しゅうを輪を描いて走りまわる。すると、ねこがフウ／＼うなりながら木に飛び上がり、にわとりは大騒ぎして八方に散り、がちょうはくびをすうつと伸ばしてシューと声をたて、アダムとバーキンはしゃがみこんで笑いこけた。

こうした喜びのまっ最中に、バーキンのうちの者がやって来た。おとうさんの百姓ワット、おかあさんのガンニルダ、それから兄のロビンと弟のディッコンなどである。

その晩はみんなで夕食にガンニルダの有名な肉バイを食べ、それからみんなは炉火を囲んでおそくまで話しこんだ。アダムは素足をニックの上に置き、腕をバーキンのくびにまわしていたが、ふたりの頭は例によって、つや／＼した黒いのも、もじゃもじゃしてしらちゃけたのが、もたれあつていた。アダムはこれまで、バーキンのうちの人たちのように好ましい家族に会つたことは一度もないと思つた。ワットは口が重くて、溫和でからだが大きく、ガンニルダはバーキンのようにやせぎすで浅黒く、やっぱり暖かみのあるりこうそな目をしていた。

ロビンはのつぽで、ぶかっこうで、しんせつ氣があり、ディッコンは小柄で、ものに熱心なたちの子で野ねずみのようにきら／＼した臆病おくびょうそな目をしていた。

みんなが上のへやへ寝に行つてからも、アダムとバーキンは横になつて長い間ひそ／＼話をしながら、なか／＼眠ろうとしなかつた。

「きみはオックスフォードに行つてると思つたよ。」と、アダムはバーキンの耳にさゝやいた。

「行くところだつたんだがね、でもぼくはまず家へ歸つて来たんだ。すると、おとうさん、のら仕事のでつたがほしいというのでね。ぼくのおとうさんは今、殿様のお百姓で、お給金をもらつてゐるんだが、暇がないから、てつたいがないと、うちの畑の種まきができないというわけなんだよ。ロビンはおとうさんの牛飼いさ、りつぽなものだよ。だけど、ディッコンはまだ小さくつて、たいして役にもたないしね。」

「ぼくてつたうよ。」と、アダムは即座に言つた。

「きみはくつや何かが手にはいるまで、どうせ逗留とちゆうしなきゃあなるまい。今のところきみを吟遊詩人と思つてはないだらうよ。どっちかかいていえば、まあじきに見えるね。」と、バーキンは言つた。

しかし、そう言つてから、冗談だということを知らせるために、アダムのあばら骨をつつ突いた。



すると、寢床の足の方に眠っていたニックが目をさまし、アダムの中から体を傳わってやって来て、両方の顔をべろ／＼なめたので、これを防ぐのと、くす／＼笑いをお／＼い消すために、ふたりはとうとう寢床のわらの中にもぐり込んでしまった。しかしアダムはやっぱり氣になった。ことわざにもあるように、ほんとうの冗談はけっして冗談ではない。——いったいどうして新しいくつと吟遊詩人の上着を手に入れたらいいか。

「種まきが済むまで、うちに泊まって、ぼくの代わりをしてくれたら、ぼくオックスフォードへ行けるんだがね。」と、バーキンは言った。

「きみのいろんなものはおかあさんがどうかしてくれるよ。とにかく五旬節が来週始まるし、そんな時にゃあ吟遊詩人はあんまり仕事もないだろうからね。」

そこで万事決まった。二、三日の後、バーキンはだいたい本を片腕にかゝえ、衣類の包みを背負い、バンとチーズとねぎを入れたかごを片方の腕にさげ、十四マイルの道を歩いてオックスフォードへ、学徒の道へと旅だった。吟遊詩人のむすこアダムは、素足に木ぐつをはいて、農夫のてつだいをする少年の生活を始めた。

ワットは、一車につなぐ牡牛を四頭持っていた。みんな小柄でやせっこけているが、なか／＼がんじょうでいそ／＼と仕事をした。

「あいつらは、まあ、人間のようだよ。」と、愛情に満ちた暖かいまなざしをして、ロビンが言った。「いつだって、犬にも劣らない人間味があるよ。」

ロビンは夜になると、牛といっしょに牛小屋で、干し草の寢床の上に寝た。そこでは、牛の息が聞えたし、ときには親しく牛たちにもものを言ってみてやることもできた。りっぱな牛飼いはみんな牛といっしょに寝るのだ、と、アダムに言ってみせた。

「ぼく、馬の方がいいや。」バイヤードのことを思い出しながら、アダムがこう言うのと、

「馬なんて、ちえっ。」ロビンは軽べつした。「畑を耕すにゃあ牛がいちばんだよ。馬は毎晩からす麦を半ペニーがとこ食べるし、夏には夏で一シリングがとこ草を食べる。——おまけにまぐさともみからもいるしなあ。牛は馬の四分の一も費用がかゝらないよ。それから、また馬にゃ蹄鉄かたびつを付けなきゃあならないが——それが一週一ペニーばかりかゝるんだ。牛は馬より氣だてもいい。——馬のようにせっかちなところは、まあ、ないからな。おれは、いつだって牛の方がいいよ。」

「よし、牛はきみのものさ。」アダムは棒を投げて、ニックに追い駆けさせながら言った。

「牛が犬のように人間味があるなんて、ばかのこつちようぶ。」

すきは堅牢なかしの轆むかえで作られ、土を掘り返すために鉄の刃をつけた大きな重いしろものであった。すきみちをまっすぐ行かせるにはひじょうな力があった。

寒い朝早く、四人は殿様の御料地へ行つて、大麦の畑を耕した。大麦の種まきは五旬節の最後にするものであった。

ロビンはつなぎあわせた牛の左側を歩いて行った。むちととげ棒を持っていたが、使う必要はまるでなかった。その代わりにロビンは声をかけて牛をさしずした。ときには歌さえも牛に歌って聞かせたが、えたいのしれぬ單調な歌であっても牛の方ではそれがわかつて、うれしそうに聞きほれるらしかった。

大きなすきの後をワットが歩いた。すきの柄をつかんで、ちょいちょいロビンにあわせて牛に歌を歌ってやった。ワットに続いてアダムとディッコンが堅い土くれを砕くために打ち棒を持って歩いて行った。これは実につらい仕事だったから、牛が五十ヤードぐらいい行くと立ちどまっては、一、二時間ほど休むので、アダムはうれしかった。それでも最初の二、三日で、すっかり肩が凝ってしまった。

休息の間に、アダムはほてった顔をふいて、あたりを見まわした。冬の畑にはいつも何かしら見るものがあった。ときにはぶよの大隊がもう／＼と日光に踊っていた。これは春のきざしなので、アダムの心はラドローに飛んで行くのであった。ロージャーは五月になったらアダムを連れにラドローへ来ると言ったのだった。そうだ、初のかっこうの鳴くころ、そのころにシュロップシャーに向けて出発しよう。

かきどおし  
唇形科に属  
する多年  
草。薄紫色  
の花をつけ  
る。

つぐみが歌ったり、きじが鳴いたりしていることもあった。一度は畑のへりにはえているかきどおしの中で二匹の小さな野ねずみが遊んでいるのを見た。その一匹が灌木の幹に登ってその皮をかじった。

うさぎは子を産んだところであつたから、アダムは赤ちゃんうさぎを追いたがるニツクを再三再四呼び返さなければならなかつた。犬だつて、殿様のうさぎを密猟してはならないのである。

畑を耕すことは正午まで、それから牛は牧場に放たれた。晝飯が済むと、ワットと家族の者は自分の地面で畑仕事をした。野菜畑を掘り耕して、えんどう・いんげん・にら・キャベツなどの植えつけをしなければならなかつたし、他の農夫たちと共同で、小麦・からす麦・らい麦・大麦などを作る畑

エーカー  
イギリスの  
地積の単  
位のわが國  
の四段二十  
四歩。

を幾つか持っていたのであつた。ワットはいい百姓だつた。自分の持ち畑で一エーカーにつき小麦を十ブッシェルも收穫した。鶏やがちょうの世話もし、羊を数頭、それから牝牛も一頭飼っていた。この牝牛は、冬の間をずっと牛小屋にすごしたのでやせていたが、家族の者たちはみんなこの牝牛が大好きで、春になって村の牝牛たちといっしょに牧場へ放してやったときには、ガンニルダが用心して、妖婆を追い拂うまじないにと、赤い毛糸をしっぽに結び付けてやった。

ブッシェル  
アメリカで  
用いられる  
量のわが國  
位の約二斗一  
合。

家の中ではまだガンニルダがせつせと働いた。煮たき、パン焼き、チーズ作りなどに忙しく、羊毛をくしけずる、それを洗う、染める、紡ぐ、織機にかけて布に織る、それを家族用の衣服に仕立てる、また衣類の洗たくもすれば、繕いものをするというふうだつた。

夕べの祈りが終つてから夕食で——ワットとその家族は善良な教会員で、十分の一税もすみやかに納めたし、毎日の礼拝にも出席した、——夕食のあとではアダムが逗留しているので吟詠や物語で夜を楽しんだ。

アダムは自作の歌やロージャーからおそわつたのなど、知っている限りの歌をみな歌つた。それから覚えていた物語も残らず語つたが、ところどころ忘れた部分は自分で作つて穴を埋めた。今までにこれほどいい聴衆はなかつた。近所の人たちも聞きにやつて来て、また、きもせずじつとすわつたまま、物語の主人公に起る事件につれて、心から笑つたりため息をついたりした。アダムと同じように、この人たちもハザロック物語がいちばん好きだつた。

「えらい若者だつたんだな。」ワットが言った。

「台所の小僧っ子になつてあんなに働くなつて、——ほんとは王子さまだつたのになあ。」

あかね  
山野に自生する  
草。根は太くて赤い。昔はこの根がたいせつな染料とされてきた。

たいせい  
十字科の植物。葉は白緑色。人が造るさいが發明されるときは、染料として用いられた。

はりえにし  
だ  
まめ科の常緑小灌木。枝は細長く緑色である。

「アダムのようにねえ。」と、ディックコンがかん高い声で言った。「アダムだって百姓の小僧っ子になって働いているもの、ほんとは吟遊詩人なのねえ。」

だれもかれも笑ったが、ガンニルダははっとしたような顔をした。  
あくる日、ガンニルダはアダムをこわきに呼んで、二枚の布地を見せた。「一枚はあかねで濃い赤に、もう一枚はたいせいで空色に、自分で染めたものであった。」

「これだけあれば、ちょうど吟遊詩人の上着を作つてあげられるよ。」と、ガンニルダは言った。「おまえさんのおふるをもらえば、洗つて裏返してディックコンのに作り直せるからね、おまえさんははなのを着るがいいよ。」

アダムは大喜びだった。三月もほとんど過ぎ去つて、公有地のはりえにしは黄色い花をちらほらつけ、小川のほとりには、やなぎが緑にめぐみ、領主の大麦も、すっかり種まきを終つた。アダムの出発すべきときがいよいよ近づいたのである。

ガンニルダがアダムの新しい上着を截つたり、からだに合せてみたり、縫つたりしている一方では、よく夜などにアダムの歌を聞きに立ち寄つたお坊さんが、ありあわせの上等の皮を一枚持ち出して、くつ屋に頼んでアダムのためにくつを一足作らせた。くつ屋はアダムの素足のまわりに線を引き型をとり、すぐ小さくなるといけないので、ちよつと大きめにくつを作りあげた。がんじょうないくつだ。すこしぶかっこうではあるけれど皮がしなやかで、つや／＼して、新しいにおいがした。アダムは、上着が仕立てあがるまで、くつをたなへ上げておいた。今欲しいものは堅琴だけであつた。それは手にはいらなかったが、代わりにほかのものが手にはいった。

ある日、アダムはワットのお使いで粉にひくため小麦の袋を粉ひき場へ持つて行った。粉ひき場は実にももしろいところだ。大きな水車がかたこと、ごろ／＼音をたてて回り、水があわをたててその上をどうつと流れる。内部は廣く、薄暗くおぼろげで、そこにある暗い通路には、幾本かのろうそくがかしのほりにつけた穴の中に深く突きさされて、黄色い光のたまりを作っている。

粉屋はアダムが持つて来た麦をしょうごに入れると、そこから麦が下の大きな石臼にざあつと流れて行き、更にそこから柔らかく細かい粉になつて箱の中へ落ちて行つた。すっかり粉にひいてしまつたと、粉屋はひき賃として自分のもらう分を量つて取りのけ、あとのアダムが持つて帰る分を袋に入れてくれた。そのとき、粉屋が「話に聞くと、おまえは少年吟遊詩人だつていうのに、かんじんの樂器は堅琴も笛も持つていないそうだな。」と、ぶつきらぼうに言った。粉だらけの赤ら顔には表われな

いが、心の内では興奮しているようであつた。  
アダムは堅琴をなくした顛末を話したが、粉屋はそれに興味を持たないで、「こつちへおいでよ。」と、ようすありげに言つて家の中に連れ込み、そこでたなから風笛を降ろして、「こんなもの吹き方を知つてるか。」と、尋ねた。

アダムはうなずいた。三、四年前に、北の國のある羊飼いかからおそわつたことがあつた。「こゝに風袋があつて、これが低音笛、これが指管だ。」と、粉屋はいろ／＼愛情をこめてさわつて見せながら、「おれはこんなによとちまつて、とても息が続かねえから、もう吹けないのだ。おまえにやるから、取つときなよ。」そう言つて、急に口をつぐんだ。

「でも、それを吹いたら、歌えないや。吹くだけで息がすっかり切れちまうもの。」と、言おうとした

が、アダムはそのことばをかみ殺した。粉屋のひろやかな正直をうな顔には、犠牲を供するつらさと、與える喜びとの間に起る心のもがきがあり／＼と見えたからである。

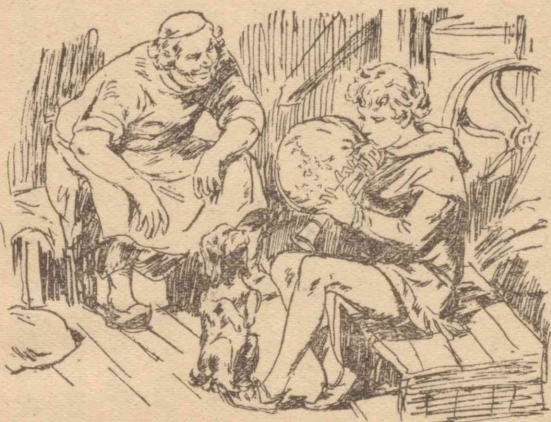
それでアダムは答える代わりに、風袋を大きくふうと吹いてふくらませたが、指管をまさぐってゐるうちに、とう／＼ちよつとした節が吹けるようになった。その間じゅう粉屋はこれをながめてここにこしていた。

「あ、それでよし。」粉屋は、アダムが顔をまっかにして吹きやめ、はあ／＼息をしたときに言った。「だが、こつちがわかれば、もつとうまく吹けるよ。こりゃ品のいい音が出るんだから。」

そう言つては失礼だと思つて、口には出さなかつたが、アダムには品のいい音色が出るとは思えなかつた。風笛なんて野蠻な、耳の割れるようなやかましい音を出すものだと思つた。

「ぼく、これ、市場でお客さんの注意をひくのに使えるよ。」アダムは声を出して言った。

「そしてぼくが吟遊詩人だつてことをみんなが知つたら、それから物語をやるんだ。」こう考えてくると、おもしろくなつた。風笛だつて、何もないよりはよっぽどましだ。「おじさん、ほんと



うにありがとう。「こう叫んだアダムの声には、はじめて心からの感謝がこもつていた。

「その風笛の音をきけば、物語なんてだれも聞きたがりなどしないだらうよ。」と、粉屋はうれしそ

に言った。「さあ、粉と笛を持って、行つた行つた、暗くならないうちに。」

アダムが百姓の家にもどつたときには、もうガンニルダが上着を仕立てあげてしまつていた。ガンニルダはそれを青い布地で作り、赤い廣そでを付け、すそにはぎざ／＼を付けた。それから布くずで赤と青とをたがいちがいにした、丸い縁なし帽まで作つてくれた。領主の屋敷の乳しぼりの女から赤い長くつしたが一足届いていたので、ガンニルダはアダムをふいうちに喜ばせようと思つておいて、今それを取り出してくれたのであつた。

アダムが胸をわく／＼させて、新調の衣裳しやうをつけ、新調のくつをはいてゐる間、家内じゅうアダムを囲んでやんやとはやしたた。アダムは風笛を取り上げ、ニックを後足で歩かせ、自分は氣どつて歩きながら、「夏は來たりぬ」を吹いた。それから風笛をだいじそうに下へ置いて、続けざまに六度ほど横とんぼ返りをした。

四月になつた。大麦は土を突いて出、アダムが耕作をてつた畑一面に、黄色っぽい緑の薄絹をひろげた。さくらそうはつぼみをつけた。初つばめがついと下がつたかと思つと、またさつと空をかすめて飛んだ。

アダムは、ワットとガンニルダ、ロビンとディッコンと牛と、それから村の友だち全部になごり惜しくも別れを告げた。この人たちにもアダムの出で行くことは悲しかつた。今まで自分たちの吟遊詩人というものを持つたことがなく、せつかくアダムのもたらした楽しみも、もうこれきり失うことになるからであつた。しかし一方、アダムに吟遊詩人らしいはでな衣裳を着せ、足には皮のくつをはか

せ、こわきには風笛をかゝえさせて、後には犬を従えさせ、りっぱに旅だたせてやれたことは、この人たちの誇りでもあった。

夕方近く、アダムは灌漑牧草地を幾つも横ぎって、城壁をめぐらしたオックスフォードの町へ向けて歩いた。夕日がまともにも目をさし、長い影が自分の方へ伸びひろがってきた。灰色の城壁のかなたにそびえるあまたの塔や尖塔は、金と紫の色あいを帯び、すがすがしい土のかおりのする空気に、数数の鐘がしるがねの調べを振り出していた。(「旅の子アダム」星野あいつ訳者代表の訳による)

【学習の手引】

- (1) 「比叡の鳥」をよく調べて、その読後感を話しあう。
- (2) 「旅の子アダム」を読み味わって、読後感を話しあう。
- (3) 「旅の子アダム」の中に出てくる人物を拾い出し、それ／＼の性格について話しあう。
- (4) 地図で、この文に出てくるイギリスの地名を調べてみる。
- (5) 「美しい世界」は、「比叡の鳥」と「旅の子アダム」の中に、それ／＼どのように表われているかを読みとって、話しあう。
- (6) できれば、「旅の子アダム」の全文を読み、感想を発表しあう。

三 光を求めて

この課は、ヘレンケラーの「私の生活」と北原白秋の「日光」との二つの文から成り立っている。この

ふたりの作者の深い生活の中から、「光を求めて」が何を意味しているかを読みとろう。

一、私の生活

ヘレンケラー

ヘレンケラー (Helen Keller) は、一八八〇年、アメリカのアラバマ州北方のタスカンジア町で生まれた。生後一年半で、大病のため、目も見えず、耳も聞えず、口もきけないようになってしまったが、サリヴァン先生に救われて、ついにテンブル大学を卒業し、博士号を受けた。この文は自叙傳の初めの一部である。

さしえ  
ヘレンケ  
ラーの幼時  
の肖像。



私の生涯を通じて忘れることのできぬいちばん重大な日は、先生のアンリマンズフィールド・サリヴァン女史が来てくださった日であります。私はこの日を境とした、二つの生涯の間の比べようもない大きな相違を思うとき、自分ながら驚かすにはいられません。それは一八八七年の三月三日、私が満七歳になる三箇月前のことでありました。

この重大な日の午後、私はなんとなくものを待つ気持で、じつと玄関にたゞずんでいました。母の手まねと家じゅうのもの騒がしさで、何か変わったことが起

すいかすらすいかなす科の多年生草。山野に自生し、初夏のころ芳香ある白色の花を開く。

ろうとしてゐるのを感じましたので、私は玄関に出て、階段の上で待っていました。午後の日光は、玄関をおくっているすいかすらの茂みをもれて、見上げる私の顔の上に降り注いでいました。美しい南の春にめぐり会わんものと、はや芽ばえそめたそのなつかしい葉と花の上を、私の指はほとんど無意識のうちになでておりました。私はどのような驚きと奇跡が私を待っているのかすこしも知りませんでした。この間から幾週間も続いた悲しみにさいなまれ、激しいたゞかいのあとで、私は身も心もぐったりと疲れてしまっていました。

あなたがたには海の上でひどい霧に出会い、手に触れることができるかと思われるばかりの白いやみにたちこめられた巨船が、不安と緊張のうちに、測鉛線で水深を測りつゝ岸の方へ探り進むとき、今に何か起るのではあるまいかと胸をおどらせながら待った経験があたりでしょうか。ちようどその船にそっくりなのが教育の始められる前の私でした。たゞ私には羅針盤もなければ測鉛線もなく、港が近いのか遠いのかそれすら知るすべがなかったのであります。「光。光を興えてください。」とは、私の魂から出た声のない叫びでありました。と、その瞬間に、私の上に愛の光が照ってきたのです。

私は近づいて来る足音を感じましたので、それが母だとばかり思いこんで、両手をさし出ししました。だれかがそれを捕らえました。そうして次の瞬間には、私は私の先生——私の心の目をあらゆるものに向かつて開いてくださったため、いゝえ、それよりも何よりも、私を愛するために来てくださった——その方の、両腕の中に強く強く抱き上げられていました。

先生は到着された翌朝、私をおへやによんで、一つのお人形をくださいました。それはパーキンス盲学校の小さい盲の子どもたちが私のために贈ってくださったものでした。けれどもそれは私があと

パーキンス盲学校  
ボストン郊外にあるサリヴァン先生校が学んだ学生

になつて知つたことであります。私がしばらくそのお人形と遊んでいますと、サリヴァン先生は私の手に「dot-dot」とつぶられました。私はすぐに、この指の遊びがおもしろくなって、それをまねようと試みました。とうとうじょうずにつぶれたとき、私は子どもらしい喜びと得意さにおはしゃぎで二階から母の所へ駆け降り、手を伸べ、指先で「dot-dot」という字をつづって見せました。そのとき私はもちろんことばをつづっていることやそんなものがこの世の中に存在していることさえ知らず、たゞさるの人まねのように、指を動かすだけでありました。それから幾日かの間に、なんのこともわからぬまゝで、私は「pin」「hat」「cap」などくだんのことばをつづけることを覚え、「sit」「stand」「walk」など少しばかりの動詞も知りました。けれども、ものにはそれ／＼名まえがあることを私が知つたのは、先生がおいでになつてから幾週間もたつて後のことであります。

ある日、私が新しいお人形を持って遊んでいますと、サリヴァン先生がつゞれ布で造つた大きい人形を私のひざの上に置いて、「dot-dot」とつぶりながら二つとも同じ名であることを、私にわからせようとなさいました。その日は既に私たちは「湯のみ」と「水」とで、たいへん苦しんだあとでありました。サリヴァン先生は「dot-dot」が湯のみで、「dot-dot」が水であることをはっきりと教えるために、苦しまれたのですが、私はいつまでたつても二つを混同しました。先生は失望して一時中止しておられましたが、機会をみてもう一度試みようとなされました。私はくり返しての試みに癩癩を起して、新しいお人形を手を取るなり、床にたゞきつけました。そして私は碎けたお人形の破片を足先に感じながら、痛快に思つたのです。私は感情の発作がしまつて後も、悲哀も後悔もさるで感じませんでした。私はこの人形を愛していなかったのです。それに私の住んでいた沈黙と暗黒の世界にはな

んらの高い情操も慈愛もないのでした。私は先生が破片を炉のかたすみには掃き寄せておられるようすを感じましたが、たゞ腹だちの原因が取りのけられたという満足を覚えたばかりです。ところが先生が帽子を持って来てくださったので、私は暖かい日なたに出かけるのだと知ってその考え（もしもこゝとばのない感覚を、考えとよぶことができると思えば）に、私は喜んで踊り上がったのでした。

ふたりは井戸小屋を歩いているすいかずらの甘いかおりにひかれて、庭の小道を下って行きました。だれかが水をくみ上げていたので、先生はとい口の下へ私の手を置いて、冷たい水が私の片手の上を勢いよく流れている間に、別の手に初めはゆっくりと、次には速く「water」という語をつづられました。私は身動きもせず立ちました。全身の注意を先生の指の運動に注いでいました。ところがとぜん私は、何かしら忘れていたもの思い出すような、あるいはよみがえってこようとする思想のあの、きとといった一種の神秘的な自覚を感じました。このときはじめて私は *Myself* は今自分の片手の上を流れているふしぎな冷たいもの名であることを知りました。この生きた一言が、私の魂を目ざめさせ、それに光と希望と喜びとを興え、私の魂を解放することになったのです。もちろん、まだ数知れぬ障害物が残ってはいましたが、それはやがて取り除くことのできるものばかりでありました。



私は急に熱心になって、いそぐと井戸小屋を出ました。こうしてものにはみな名のあることがわかったのです。しかも一つ／＼の名はそれ／＼新しい思想を生んでくれるのでした。そうして庭から家へ帰ったとき、私の手に触れるあらゆるものが、生命をもって躍動しているように感じはじめました。それは興えられた新しい心の目をもって、すべてを見るようになったからです。へやにはいるとすぐに私は自分がこわしたお人形のことを思い出して、炉のかたすみを探り寄って破片を拾い上げ、それを継ぎ合わせようと試みましたが、だめでした。私の目には涙がいつぱいたまっていました。自分のしたことがわかったので、私は生まれてはじめて、後悔と悲哀とに胸を刺されました。

私はその日、たくさんのことを覚えめました。全部覚えてはいませんが、その中には *mother*, *father*, *sister*, *teacher* などのことばがあったことを記憶しています。あゝこれらのことばこそ実に、「花咲くアロンのつえ」のように、私のためにこの世を花園と化してくれたものであります。出来事の多かったこの日も暮れて、小さい寝台に横たわりながら、この日が自分にもたらした喜びを思い返していたときの私ほど幸福な子どもを発見することは困難でしょう。私は生まれてはじめて、きたるべき新しい日を待つことを知りました。

二

私は魂のとつぜん目ざめに続く一八八七年の夏に起った多くの出来事を記憶してあります。明けも暮れても手で探り歩いて触れうる限りのいっさいのもの名を知ることになりました。それもそのはず、いろんなものを扱い、その名や用い方を知るにつれて、自分以外の世界と自分との親しさの感じは、いっそう楽しくたしかなものになってくるばかりでありました。

キンぼうげ  
うまのあし  
がた科の有  
毒な草。高  
さ約六〇セ  
ンチくら  
い。四、五  
月ころ黄色  
い花をつけ  
る。  
テネッシー  
アメリカ、  
ミシシッピ  
川の支流、  
川のハイオ  
アラバマ州  
アラバマ州  
テネッシー  
州を流  
れる。

ひなぎくとキンぼうげの咲くころ、私はサリヴァン先生に手を引かれて、農夫が種まきの準備にいそんでいる畑を横ぎり、テネッシー川の堤に行きました。暖かい草の上に腰をおろして、私はそこではじめて、自然の恵みについての教訓を学びました。どうして太陽と雨とがああ美しい、また、食物としては有用ないっさいの植物を地中からはえさせるのか、どうして鳥が巢を造り、いたる所に住んでいて蕃殖をするのか、またどうしてりすやしか・ししを初めとしてその他すべての生きものが、食物やすみかを見つめるのかということを学んだのです。こうして事物についての知識が増すにつれて、私は自分の住む世界の喜びをいかに強く感じてきました。算術の計算や地球の形を描くことを学ぶずっと以前に、サリヴァン先生は芳しい森の中で、一枚一枚の草の葉や、私の小さい妹の手のえくぼと曲線の中などに美を発見することを教えてくださいました。先生は私の思想をそも／＼の初めから自然と結びつけて、「小鳥と花と私とは楽しいお友だち」であることを感じさせてくださいました。けれども私はそのころ、自然はいつも必ずしもしんせつではないことを知るような、一つの経験に出会いました。ある日先生と私は遠い散歩からの帰途にありました。朝の間は晴れていましたが、私たちが帰るころには、しだいになま暖かくむし／＼としてきました。二、三度私たちは道ばたの木陰で休みましたが、いちばんおしまいに足を止めた所は、家からあまり遠くない一本の櫻の木の下でありました。その木陰はひじょうに氣持がよくて、木は登りやすかったので、私は先生に助けていただき、小高い枝の間に腰を掛けることができました。木の上があまり涼しかったので、サリヴァン先生はふたりでそこでお中食を食べようとおっしゃいました。私は先生が家までお弁当を取りに行つてらっしゃる間、そのまゝおとなしく待つている約束をしました。

ふいに一つの変化が、木の上を通り過ぎました。太陽の熱がすう／＼と空氣から消えてゆきました。私にとつて光の存在を意味する熱が、空氣から消えたので、私は空が曇ったことを知りました。ふしぎなおいが大地からたち上がってきました。それが、いつでも雷雨に先だつてくるにおいであることを知っていましたので、私の心臓は言いようのない恐怖に襲われました。私はお友だちからも大地からも離れて全くひとりぼっちであることを急に感じました。廣大なもの、なんとも知れぬものが私を包んでしまいました。私は身動きもせず、待つていました。どうつとするような恐怖が私の全身を走りました。私は先生の歸りを待ちこがれましたが、何よりも早く木から降りたいと思いました。

ふつと不氣味な沈黙があつたと思うと、次の瞬間木の葉がいつせいに揺れて、おの／＼きが幹から枝を傳わつて走り、風は、私が力限り根限り枝にしがみついていなければ、振り落されるほど激しく吹いてきました。木はねじれて身をもがき、小枝はちぎれてつぶてのように私のまわりに落ちて來ました。飛び降りたい激しい衝動を感じながら、恐怖のために縛られて身動きもできず、私は枝の根元に身を堅くしてうずくまっていました。枝が私のまわりでむちのようにたわみました。その間にも、私は何かひじょうに重いものが落ちて、その響がすわっている大枝まで傳わつてくるかと思われるような、震動をと／＼感じました。それが私の恐怖心をいっ／＼そうつのらせて、もう、今にも木が吹き倒されて私もおし／＼に落ちるのだと思つたせつな、私は先生の腕に抱き止められ、助け降ろされました。そうして私はもう一度足の下に大地を踏み喜びに震えながら、先生にしがみつきました。私は一つの新しい教訓を学びました——自然は「その子らにた／＼かいをいどみ最も優しい手の中にさえ裏ぎりのつめを隠す」ものであることを知つたのです。



ミモウザ  
ねむの別  
名。まめ科  
の落葉喬木。  
高さ約  
十メートル  
多。南國に

このことがあってから、私は長い間木登りをやめていました。思っただけでも身震いがしました。けれどもこの恐怖心にうち勝ったのは、満開のミモウザの甘いかおりの誘惑でありました。ある美しい春の朝、私はあずまやでひとり腰を掛けていましたが、ふと、えもいえないつかしい香氣が空気に浮動しているのを感じました。私は思わず立ち上がって、両手をさし出しました。まるで春の女神があずまやの中を通り過ぎたのかと思われて「なんだろう。」と私はいぶかりましたが、すぐそれがミモウザの花のかおりであることがわかりました。その木は小道の曲がりかどの垣根近くに立っていることを知っていましたので、私は庭のはずれまで手探りで行きました。やはりそうでした。暖かい太陽を浴びて喜びに身を震わせながら、花をいっぱいにつけた枝は、ほとんどだけの高い草の葉に触れるまでたれていました。これほど完全に美しいものが、今までこの世にあつたでしょうか。その敏感な花は、わずかでも地上の手が触れると、すぐに身を縮めるので、まるでバラダイスの木がこの世に植えられたようでありました。私は花びらの雨をくぐって、大きな幹の所まで進みましたが、そこでちょっとためらって立ち止まりました。それから枝と枝との間の大きなすきまに足を差し入れて登りはじめました。枝がひじょうに太くて、皮が手を痛めるので、つかまっているのはなか／＼むずかしかつたのですが、何かしらすてきな驚くべきことをしているような喜ばしい氣がして、だん／＼と高く登り、しまいは、ずっと以前にだれかがとり付けて、今では木の一部になってしまっている小さな腰掛けの所まで登り着きました。ばらの花の雲にのつた仙女のような氣持で、私は長い／＼間そこにすわっていました。その後もこの「バラダイスの木」に登って、美しいことを考え輝かしい夢をゆめみながら、私は多くの幸福な時間をすごしたものです。

バラダイス  
天國の樂園。

## 三

今や私はすべてのことばのかぎを握ることができましたので、早く自由に使えるようになりたくてたまりませんでした。耳の聞える子どもは、特別な努力をせずとも、ことばを覚えることができず。彼らは人のくちびるから出ることばを、いわば飛んでいる間に宙でらく／＼とつかまえることができますが、それと違ってつんぼの子どもは、手数がかるうえにしば／＼苦しい方法によって、それをわなにかけて捕らえねばなりません。けれども方法はなんであるにせよ、その結果は驚くべきものがあります。こうしてもその名を知ることから、しだいに一步一步と進んで、しまいは最初のたどたどしいつゞり法とシェークスピアの思想の世界との間に横たわる廣大な距離を、横ぎることすらできるようになりました。

シェークス  
ピア  
(一五箇—二六  
云)イギリ  
スの文豪。

初めの間は、先生が何か新しいことを教えてくださっても、私はあまり質問もしませんでした。自分の思想が漠然としているうえに用語も不完全であつたためです。けれども事物についての知識が増大するにつれ、ことばを多く学ぶにつれて、私の疑問の範囲はひろまってゆき、幾度も同じ問題に立ちもどっては、もっと詳しい説明を求めようになりました。ときには、今まで経験によって私の頭に刻みつけられていた印象が新しいことばによってよみがえることもありました。

ある朝私が「love」ということばの意味を尋ねたときのことを記憶しています。それはまだ私がかたくさんのことばを知るよりも前のことでありました。私は庭で教本の早咲きのすみれの花を見つけて、先生のところへ持って行きました。先生は私に接吻しようとされましたが、私はそのころ母よりほかのだれからも接吻されることを好みませんでした。そこでサリヴァン先生は一方の腕に優しく私

を抱して、私の手に「I love Helen」と指話なれしました。

「LoveとIというのはなんですか。」と私は尋ねました。

先生はいっそう私の方に身を寄せて、「それはこゝにありませんよ。」とおっしゃって、私の心臓を指さされました。そう言われて私はじめて自分の心臓の鼓動に気がついたのです。けれどもそのころ私は自分が手で触れて見ぬ限り、何ものも理解することができなかったため、先生のことばは私をたゞへん当惑させました。

私は先生が持つておられたすみれの花をかいで、ことばと身ふりと半々にまぜて、「Loveとは花の美しさのことですか。」という意味の質問をしました。

「Yes。」と先生はあっしやいました。

私はまた考えました。そのとき暖かい太陽が私たちを照らしていました。（これがLoveではないかしら。）と私は暖かい光のさして来る方角をさしながら「これがLoveではありませんか。」と問うたのです。

私にはあらゆるものを生長させる熱の源である太陽以上に、美しいものがあるとは考えられませんでしたから。けれどもサリヴァン先生はこんども首を振られましたので、私は全く困って、がっかりしました。先生が「Love」を示すことのできないのがふしぎでなりませんでした。

やがて一日二日の後、私は大きな異なったなんきん玉をきまめた順序に——たとえば二つの大きい玉に三つの小さい玉というふうに——糸に通す練習をしていました。私は何度もまちがえました。が、サリヴァン先生は優しい忍耐をもって、そのたびごとにしんせつに教えてくださいました。おし

まいに私はひじょうに明らかなまちがいをして、自分でも気がつきましたので、一瞬間全身の注意を凝らして、どういう順序になんきん玉をつなぐのであったか考えていました。そのときサリヴァン先生は私の額に手を当てながら、力づく「Think」と指話されました。

いわずまのように、私はこのことばが今自分の頭の中に起っている働きの名であることを悟りました。これが私が抽象的観念について、意識的な認識をもったそも／＼の最初であります。

長い間私はじっと手を止めていました——ひざの上のなんきん玉を考えていたのではなくて、この新しい観念の光に照らして、「Love」の意味を発見しようと努めていたのです。その日は朝から太陽が雲に隠れて、とき／＼雨が降ったりしていましたが、急に太陽が南部特有のうら／＼かさをもって輝きはじめました。

私はもう一度先生に、「これがLoveではありませんか。」と尋ねました。「Loveとは、今太陽が出る前まで、空にあった雲のようなものですよ。」と先生はあっしやいました。私はこの答を、そのとき了解することができませんでしたが、先生はもっと簡単なことばで説明してくださいました。「あなたの手で雲に触れることはできませんが、雨には触れることができます。そして花やかわいた土地が暑い一日のあとで、どんなに雨を喜ぶかを知っています。あなたは愛には触れることができますが、それがあらゆるものに注ぎかける優しさを感じることはできません。愛がなければあなたは幸福であることもできず、その人と遊ぶことも望まないでしょう。」

この美しい真理は、たちまち私の心に徹しました。私は自分の魂と他の人の魂との間には目に見えない糸が結ばれていることを感じました。

〔私の生涯〕岩橋武夫・芥川潤の訳による

【注】花咲くアロンのつえ——旧約聖書、民数紀略第十七章による。あるとき神は予言者モーゼに言われた。汝はイスラエルの人々に告げて、一家より一本ずつのつえを出させ、それを神の前に置くように。自分が、祭司として選んだ者のつえは、芽が出るだろうと。十二本のつえが出され神の前に置かれた。翌日アロンのつえは芽をふき、つぼみがつき花が咲いて、はたんきょうの実を結んだという。

二、日 光

北原 白秋

北原白秋、本名は隆吉。明治十八年（一八八五）福岡縣で生まれ、昭和十七年（一九四二）になくなった。詩人。著書には「邪宗門」・「桐の花」・「雀の卵」・「白秋民謡集」・「洗心雑話」などたくさんある。

もろ手そろへて日の光すくふ心ぞあはれなる。

すくへどすくへど日の光、

光りこぼるる、音もなく。

光りかゞやく何ものかにぎりしめんとす、日もすがら。

光りかゞやく空中に手をにぎりしめ、また開き。

何かおどろき、見まはせど、

かゞやくものは日の光。

ふっともらししたため息をわがものぞとは人知らず。

光あふるるつたかづら、

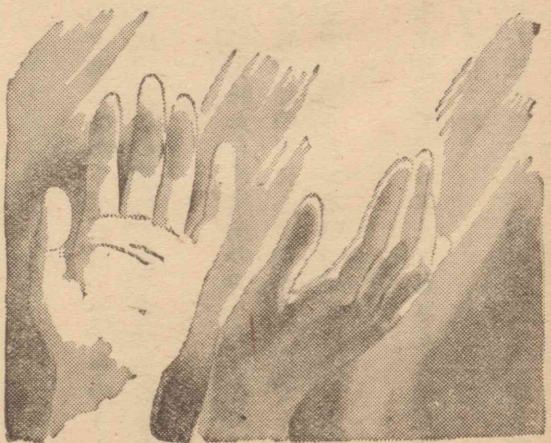
ゆりうごかすは日の光。

たゞ日の光、日のしづく。

〔白秋全集〕による

【学習の手引】

- (1) ヘレン・ケラーは、どのようにしてことばを学んだか、簡條書にしてみる。
- (2) ヘレン・ケラーの心は、どのようにして開かれていったかを読みとって、話しあう。
- (3) サリヴァン先生についてヘレン・ケラーはどんなに考えているかということ話しあう。
- (4) 白秋の「日光」を、詩の味わいがよく出るようにくふうして朗読する。
- (5) この詩は、どんなことを言っているのか、よく考えて話しあう。
- (6) 「私の生活」と「日光」とは、どんなところに通じあうものがあるかを考え、「光を求めて」ということばの意味が、それ／＼どのように表わされているかを話しあう。



## 四たき火

志賀直哉

志賀直哉は、明治十六年（一八八三）宮城縣石巻市で生まれた。小説家。長編小説に「暗夜行路」・「友への手紙」など、中編小説に「和解」、短編小説に「網走まで」・「大津順吉」・「清兵衛と飄箏」・「赤西彌太」など、童話集に「日曜日」がある。

山の上の夕暮れはいつも氣持がよかった。ことに雨あがりの夕暮れはかくべつだった。そのうえ、働いてその日の仕事をながめながらいっぶくやっているとときには、だれの胸にも淡く喜びが通いあって皆快活な氣分になった。

前の日も午後から晴れて、美しい夕暮れになった。きのうは鳥居峠から黒檜山の方へ大きなじがでてなお美しかった。皆は長いこと、こゝで遊んだ。小屋はならの林の中にあつたから、皆でその高いならに木登りをして遊んだ。にじがよく見えると言うと妻までが登りたがるので、Kさんとふたりで三間ほどの所まで引っぱり上げた。

自分と妻とKさんとは一つ木に登った。Sさんはその隣の木に登って、SさんとKさんとは互に自身の方が高くなるうとして五、六間の高さまではりあつて登って行った。

「まるで安樂いすですよ。」Kさんは高い所のぐあいよく分かれた枝のまたに仰向けに寝て、巻きたばこをふかしながら大波のようにその枝をゆすぶってみせたりした。

Kさんの二番めの子をおぶつた「市や」という年のわりに顔の大きい低能な男の子が夜食の知らせに来て、ようやく皆が木を降りたときには、妻が木の上から落したくしがあかりなしでは捜せないほど、地面の上は暗くなつていた。

自分は前日のこの樂しみを思いながら、「晩、舟に乗りませんか。」と言つた。皆賛成だつた。

食事だけ別れ／＼にして、四人はまた大きいいろりに集まつた。Kさんは炉の大きい茶がまの湯で赤ん坊に飲ますコンデンスミルクを溶いていた。

Kさんは氷藏からならの厚い板をかゝえて來た。もみの太い幹と幹との間に湖水の面が銀色に光つて見えた。

小舟は岸の砂地へ半分引き上げてあつた。晝の雨でたまつた水をKさんがかき出す間、三人は黒くぬれた砂の上に立っていた。

Kさんはかゝえて來た厚い板を舟べりのいい位置に渡して、「お乗りください。」と言つた。妻から先へ乗せた。小舟は押し出された。

静かな晩だ。西の空にはまだ夕ばえのなごりがわずかに残っていた。が、四方の山々はいもりの背のように黒かつた。

「Kさん、黒檜がたいへん低く見えるね。」とSさんがへさきから言つた。

「夜は山は低く見えますよ。」Kさんともに腰掛けて短いかいを靜かに動かしながら答えた。

「たき火をしますわ。」と妻が言つた。小鳥島の裏へはいろうとする向こう岸にそれが見える。靜か

コンデンス  
ミルク  
粉ミルク。



な水に映って二つに見えていた。

「今ごろ変ですね。」とKさんが言った。「わらび取りが野宿をしているのかもしれないよ。あすこに古い炭焼きのかまが有りますから、その中に寝ているのかもしれないよ。行ってみましょうか。」

Kさんはかいに力を入れてへさきの方向を変えた。舟は静かに水の上をすべった。Kさんは小島島から神社の方へひとり泳いで来るとき、湖水を渡っていたへびと出会って驚いた話などをした。

たき火はKさんの言うようにかまのたき口で燃えていた。Sさんは「ほんとうにあの中に人がいるのかね、Kさん。」と言った。

「さつとしますよ。もしいなければ消しておかないと悪いから、上がりましょうか。」

「ちよっと上がってみたいわ。」と妻も言った。

岸へ来た。Sさんがなわを持って先へ飛び降りて、舟のへさを石と石との間へ引き上げた。Kさんはかまの前にしゃがんでしきりに中

をのぞいていた。

「寝ていますよ。」

ひえ／＼としているので皆にもたき火はよかった。

Sさんは落ちてゐる小枝の先でおき火をかき出してたばこをつけた。

かまの中でこそ／＼音がして、人のうなる声があった。

「しかし、こうして寝ていたらあつたかいだらうね。」とSさんが言った。

Kさんはその辺に落ち散っている枝を火に積み上げながら、

「しまいに消えますからね。寝こんでしまうと、明けがたはずいぶん寒いでしょうよ。」と言った。

「こんなそばでたいも窒息しませんの。」

「中でたかなければいじょうぶです。それよりかまがあまり古くなるとひとりにくづれることがあるんですよ。ことに雨のあとにはあぶないですよ。」

「こわいわ、Kさん教えてやるといいわ。」

「ほんとうに教えてやる方がいいね。」とSさんも言った。

「わざ／＼教えなくても。」とKさんは笑いだした。「これだけ大きな声で話していればみんな聞えて

しますよ。」

かまの中でまたこそ／＼と枯れ葉の音をたてた。皆はいっしょに笑いだした。

「行きましょうか。」と妻は不安そうに言いだした。舟へ来ると、Sさんは先に乗りこんで、「こんどはぼくがこごう。」と言った。

小島島と岸の間はことに静かだった。晴れた星の多い空を舟べりからそのまゝ下に見ることができた。

「こつちでもたき火をしましょうかね。」とKさんが言った。

Sさんはくせになっているドナウウエレンの口笛を吹きながらこいでいた。

ドナウウエレンの有名な曲  
ツチが有名な曲  
ワルツのダ  
=ニールツの  
さびなみ  
をいう。

「おいKさん。どの辺へ着けるんだい。」とSさんがきいた。Kさんはふり返って見て、「ちょうどこの見当でようござんすよ。」と答えた。

それから、なんということなしに皆しばらく黙ってしまった。舟は静かに進んで行った。

「岸ぐらいまでなら泳げるか。」と自分は妻にきいてみた。

「どうですか。泳げるかもしれないわ。」

「ちくさん、泳げになるんですか。」Kさんは驚いたように言った。

「いつごろから泳げるの。」と自分はKさんにきいた。

「少しあったかい日なら今でも泳げますよ。去年今ごろ泳ぎましたよ。」

「少し寒そうだ。」自分は手を水に浸してみて言った。「しかし先にもみじ見に行つて、朝早く蘆の湖で泳いだことがあるけれど、思ったほどではなかった。それよりも、四月初めに蘆の湖で泳いだことがある。」

蘆の湖  
箱根山中の湖。

「昔はお偉かったのね。」と妻は寒がりの自分をひやかした。

「この辺でうしかう。」

「えい。どうぞ。」

Sさんは三かい、四かい力を入れてこいだ。舟のへさはぎり／＼と音をさせて砂地へ着いた。皆は砂へ降り立った。

「こんなぬれていてもたき火ができますの。」

「しらかばの皮で燃しつけるんです。油があるのでぬれていてもよく燃えるんですよ。私、たき木を

集めますから、しらかばの皮をたくさん集めください。」

一面にしだや、やまぶきや、やつでの葉のような草のあい茂った暗い森の中にはいつてたき火の材料を集めた。

皆は別れ／＼になったが、KさんやSさんの巻きたばこの先が吸うたびに赤く見えるのでそのいる所が知れた。

しらかばの古い皮が切れて、その端を外側にそらししている。それをたよりにはぐのだ。とき／＼Kさんの枯れ枝を折る音が静かな森の中に響いた。

持てないだけになると、岸の砂地へ運んだ。もうだいたいぶたまった。

何かに驚いて、Kさんがいきなり森から飛び出して来る。

「どうしたんだ。」

「いましたよ。虫ですよ。あのしりの光っているやつが、こうやってしりを振っていたんですよ。たまつたもんじゃあない。」Kさんはしゃくとり虫の類をひじょうにこわがった。息をはずませている。それを見にはいった。先にたつたSさんが、

「この辺かい。」と後の方にいるKさんを顧みた。

「そこに光ってるじゃあ、ありませんか。」

「なるほど、これだね。」Sさんはマッチをすって見た。一寸ほどのはだか虫、そのわりに大きいしりをもたげてゆる／＼と振っていた。

その先が青くぼんやり光って見える。

「これが、そんなにこわいかね。」とSさんが言った。

「これからはそいつがいるんで、うっかり歩けませんよ。」とKさんは言う。

そして、「もうたいがいようござんすから、たきましようか。」と言った。

皆はまた砂地へ出た。

しらかばの皮へ火をつけるとぬれたまゝ、カンテラの油煙のようなまっ黒な煙を立てて、ぼう／＼燃えた。Kさんは小枝からだん／＼大きい枝をくべてたちまち燃しつけてしまった。その辺が急に明るくなった。それが前の小鳥島の森まで映った。

Kさんは舟からなら厚板を持って来て、自分たちの腰をおろす所を作ってくれた。

「虫だけは山に育った人のようじゃあ、ないね。」Sさんが言った。

「ほんとうですよ。」とKさんも言った。「初めから知っている、それほどでもないんですが、ふいだとずいぶんたまげますよ。」

「山にはべつにこわいものって、いませんの。」

「何もいませんよ。」

「だいじゃなんていないの。」

「いませんよ。」

「まむしは。」と自分がきいた。

「箕輪<sup>みわ</sup>辺まで降りるととき／＼見かけますが、上ではまむしは一度も見たことはありませんよ。」

「昔は山犬がいたんだろう。」とSさんが言った。

「子どものころよく声だけ聞きました。夜中に遠ぼえを聞くと、寂しい、いやな氣持がしたのを覚えてしますよ。」

KさんはKさんのなくなったおとうさんが夜づりが好きで、ある夜山犬に囲まれて、岸傳いに水中を帰って来た話とか、この山が牧場になった年、馬が食われて半分ぐらいになっているのを見た話などをした。

「その年、肉にダイナマイトを入れて、殺したら、一週間で絶えてしまいました。」

自分は四、五日前、地獄谷<sup>じごく</sup>の方で小さい野獸のどくろを見た話をする、Kさんは、

「きつと、さ／＼くまでしよう。わしかなんかに食われたのかもしれないよ。さ／＼くまは弱い獸ですからね。」と言った。

「じゃあ、この山には何もこわいものはいないのね。」と臆病<sup>おくびょう</sup>な妻はKさんに念をおした。するとKさんは、

「おくさん。私大入道を見たことがありますよ。」と言って笑いだした。

「知っていますよ。」と妻も得意そうに言った。「霧に自分の影が映るんでしょう。」妻はそれを朝早く、鳥居峠に雲海を見に行ったときに経験した。

「いゝえ、あれじゃあ、ないんです。」

子どものころ、前橋へ行った夜の帰り、小暮<sup>こくれ</sup>から二里ほど来た大きい松林の中でそういうものを見た、という話だ。一町ぐらい先でぼんやりその辺が明るくなると、その中に一丈以上の大きな黒いものが立ったという。しかし、しばらくして、大きな荷を背負った人が路傍に休んでいた、その

人が歩きながらたばこをのむために荷の向こうでとき／＼マッチをすったのだということが知れたと  
う話である。

「不思議なんてたいがいそんなものだね。」とSさんが言った。

「でも不思議はやっぱりあるように思いますわ。」と妻が言った。「そういう不思議はどうか知らない  
けど、夢のお告げとかそういうことはあるように思いますわ。」

「それはまた別ですね。」とSさんも言った。そして急に思い出したように、

「そら、Kさん、去年君が雪で困ったときの話なんか、そういう不思議だね。まだ聞きませんか。」と  
自分の方を顧みた。

「うゑ。」

「あれはほんとうに変わりましたね。」とKさんも言った。こういう話だ。

去年、山にはもう雪が二、三尺も積もったころ、東京にいるねえさんの病氣が悪いという知らせで  
Kさんは急に山を下って行った。

しかしねえさんの病氣は思ったほどではなかった。三晩泊まって帰って来たが、水沼みずぬまに着いたのが  
三時ごろで、山へは翌日登るつもりだったが、わずか三里を一晚泊まって行く氣もしなくなつて、K  
さんは予定を変えて、しかしもし登れそうもなければ山の下まで行って泊めてもらうつもりで、水沼  
を出た。

そしてちやうど日暮れに二の鳥居の近くまで来てしまったが、からだも氣持もあまりに平氣だっ  
た。それに月もある。Kさんは登ることに決めた。しかしそれから登るにしたがつて、雪はだん／＼  
深くなった。Kさんが山を降りたときは倍ぐらいになっていた。それでも人通りのある所なら、深  
いなりに表面が固まるから、さほど困難はないが、まるで人通りがないので柔らかな雪へ腰ぐらいま  
ではいる。そのうゑ、一面の雪でどこが道かよく知れないから、いくら子どもから山に育つて慣れき  
ったKさんでも、だん／＼にまいってきた。

月明かりに鳥居峠はすぐ上に見えている。夏はこの辺はこんもりとした森だが、冬で葉がないから  
上がすぐ近くに見えている。そのうゑ、雪も距離を近く見せた。いまさらひき返す氣もしないので、  
ありのほうのように登って行くが、手の届きそうな距離が実に容易でなかった。もしひき返すとして  
も、さいわい通った跡をまらわらず行けばまだいいとして、それをそれたら困難は同じことだ。上  
を見ると、なにしろそこだ。

Kさんは、もうひと息、もうひと息と登った。べつに恐怖も不安も感じなかった。しかしなんだか  
氣持が少しぼんやりしてきたことは感じた。

「あとで考えると、ほんとうはあぶなかつたんですよ。雪で死ぬ人はたいがいそうなってそのまゝ眠  
ってしまふんです。眠ったまゝ死んでしまふんです。」

よくそれを知りながら、ふしぎにKさんはそのとき少しもそういう不安に襲われなかった。そし  
て、ともかく、氣持を張った。なにしろからだがいい。それに雪には慣れていた。とう／＼それから  
二時間あまりかゝつて、ようやく峠の上までこぎつけた。

雪の深さはいっそうまされた。しかしこれからちょっと、下りになる。下ればずっと平地だ。時計  
を見ると、もう一時過ぎていた。



遠くの方にちうちんが二つ見えた。今時分、とKさんはふしぎに思った。しかしとにかくひとりきりのところに人と会うのはすれちがいにしろうれしかった。Kさんはまた元氣を奮い起して、降りて行った。そして、覚満淵の辺でそれらの人々と出会った。それはUさんという、Kさんの義理の兄さんと、そのころKさんの家に泊まっていた氷切りの人夫三人とだった。「お帰りなさい。たいへんでしたろう。」とUさんが言った。

Kさんは、「今時分どこへ行くんですか。」ときいた。

「今、あつかさんに起されて迎えに来たんですよ。」とUさんはなんの不思議もなさそうに答えた。Kさんはぞっとした。

「私はその日帰ることは知らしてもなんにもなかったんです。あとで聞くと、あつかさんがみいちゃん（Kさんのうえの子ども）を抱いて寝ていると、——べつに眠っていたようでもないんですが、ふいにUさんを起して、Kが帰って来たから迎えに行ってくださいと言ったんだそうです。Kが呼んでいるからっていうんだそうです。あんまりはつきりしているんで、Uさんも不思議とも思わず、人夫を起してたくさせて出て来たというんですが、よく聞いてみると、それがちようど私がいちばん弱って、氣持が少しぼんやりしてきたときなんです。山では早く寝ますからね。七時か八時に寝て、ちようど皆ぐっすりと寝こんだときなんです。それを四人も起して、出してよこすんですから、あつかさんのはよほどは、つきり聞いたに違いないのです。」

「Kさんは呼んだの。」と妻がきいた。

「いゝえ。峠の向こうじゃあ、いくら呼んだって聞えませぬもの。」

「そうね。」と妻は言った。妻は涙ぐんでいた。

「そんな氣がしたぐらいではなか／＼、夜中に皆を起して、腰の上まで埋まる雪の中を出してやれるものではないんです。それは巻ききやはんの巻き方がひとつ悪くても、一度解けたら、凍って棒になつてしまいますから、とても、もう巻けないんです。だからしたくがずいぶんやっかいなんです。したくはどうしても二十分やそこらかゝるんですよ。その間あつかさんは、ちっとも疑わずにおむすびを作ったり、火をたきつけたりしていたんです。」

さつきから、小鳥島でふくろが鳴いていた。「五郎助」といって、しばらく間をおいて、「奉公」と鳴く。

たき火も下火になった。Kさんは懐中時計を出して見た。

「何時。」

「十一時過ぎましたよ。」

「もう帰りましょうか。」と妻が言った。

Kさんは勢いよく燃え残りのたき木を湖水へ遠くほうった。たき木は赤い火の粉を散らしながら飛んでいった。それが、水に映って、水の中でも赤い火の粉を散らしたたき木が飛んでゆく。上と下と、同じ弧を描いて水面で結びつくと同時に、じゅっと消えてしまう。そしてあたりが暗くなる。それがおもしろかった。皆でほうった。Kさんがあとに残ったおき火をかいでじょうずに水をはねかして消してしまった。

舟に乗った。わらび取りのたき火はもう消えかゝっていた。舟は小鳥島をまわって、神社の森の方

へ静かにすべって行つた。ふくろの音がだん／＼遠くなった。

〔豊年虫〕による

【学習の手引】

- (1) この文のすじを短いことばで言ってみる。
- (2) この文の読後感を話しあう。
- (3) 文中のいろ／＼な場面を簡條書にして、それ／＼の場面が出た話題を書き出してみる。
- (4) 次の問に答える。
  - イ、「『今ごろ変ですね。』とKさんが言った。」というのはなぜか。
  - ロ、「『そうね。』と妻は言った。妻は涙ぐんでいた。」とあるが、なぜ妻は涙ぐんでいたのか。
- (5) この課の文章についてどのように感じたか。文にまとめて、発表しあう。

五 文章について

谷崎潤一郎

谷崎潤一郎は、明治十九年（一八八六）東京で生まれた。小説家。著書には「春琴抄」・「細雪」・「盲目物語」などがある。

私は、文章に実用的と藝術的との区別はないと思います。文章の要は何かといえは、自分の心の中にあること、自分の言いたいと思うことを、できるだけそのとおり、かつ、めいりょうに伝えることにあるのでありまして、手紙を書くにも小説を書くにも、べつだんそれ以外の書きようはありません。要は「華を去り実に就く」のが文章の本旨だとされたことがあります。それはどういうことかといえは、よけいなかざりけを除いて、実際に必要なことばだけで書く、ということでもあります。そうしてみれば、最も実用的なものが、最もすぐれた文章であります。

明治時代には、実用に遠い美文という一種の文体がありまして、競ってむずかしい漢語を連ね、語調のよい、きれいな文字を使って、景を敘したり情を述べたりすることがはりました。

明治時代の美文というものは、太平記などの文体から脈を引き、その言いまわしを学んだものであります。その時分は、小学校の作文でも、こういう漢語を苦心して捜し出したり寄せ集めたりするけいこをしたもので、卒業式の答辞だとか、観櫻の記だとかいう文章は、みなこの文体でつゞいたのであります。昔は知らず、現代の人間には、これではあまりに裝飾が勝ちすぎて、自分の思想や感情を表現するのに不便であります。ですからその後この文体はしだいにほろんでしまいました。実用的でない文章といえは、まずこういうふうなものよりほかに考えることができませぬ。

こゝでちよつとおことわりしておきますが、文章というものを二つに分けて、韻文と散文とに区別することがあります。韻文とは何かといえは、詩や歌のことでありまして、これは人間が心の中にあることを他に傳達するのみでなく、自ら詠嘆の情をこめて歌うように作ったもの、したがって歌いやすいように字の数や音の数を定め、その規則にあてはめてつゞるのでありますから、なるほど文章の一種ではありますけれども、普通の文章とは多少目的が違うだけに、それはそれとして、特別な発達を遂げております。で、実用的でなくてしかも藝術的な文章というものがあるとすれば、この韻文がまさしくそれにあたりますけれど、私がこれから説こうとするものは、韻文でない文章、すなわち散

太平記  
吉野朝の争  
乱を記した  
軍記物語。  
作者不詳。  
一三四五年  
に完成した  
もの。

文のことです。

そこで、韻文でない文章だけについていえば、実用的と藝術的との区別はありません。藝術的な目的で作られる文章も、実用的に書いた方が効果があります。昔は口でしゃべることをそのまゝに書かず、文章の時は國語と違った言い方をしまして、ことばづかいなども、民間の俗語を用いては礼に欠けていると思ひ、わざと実際に遠くするように修飾を加えた時代がありますので、あの美文のようなものが役にたったこともありませうけれども、今日はそういう時代でない。現代の人は、どんなにきれいな、音調のうるわしい文字を並べられても、実際の理解が伴わなければ、美しいと感じない。礼儀ということも、全然重んじないのではないが、高尚優美な文句を聞かされたからといって、それを礼儀とは受け取らない。第一、われわれの心のはたらきでも、生活の状態でも、外界の事物でも、昔に比べればずっと変化が多くなり、内容が豊富に、精密になっておりますから、字引をあさって、昔の人が使いふるしたことをひびいてきたところで、現代の思想や感情や社会の出来事にはあてはまらない。それで、実際のことが理解されるように書こうとすれば、なるべく口語に近い文体を用いるようにし、俗語でも、新語でも、ある場合には外國語でも、なんでも使うようにしなければならぬ。つまり、韻文や美文では、わからせるということ以外に、目で見て美しいことと、耳で聞いて快いことが同様に必要な条件でありましたが、現代の口語文では、もっぱら「わからせる。」「理解させる。」ということに重きを置く。他の二つの条件も備わっていればいるに越したことはありませんけれども、それにこだわってはいけません。実に現代の世相はそれほど複雑になっているのでありまして、わからせるように書くという一事で、文章の役目は手いっぱいなのであります。

文章をもって表わす藝術は小説であります。しかし藝術というものは生活を離れて存在するものではなく、ある意味では何よりも生活と密接な関係があるのでありますから、小説に使う文章こそ、最も実際に即したものでなければなりません。もし皆さんが、小説には何か特別な言い方や書き方があると思ひになるのであれば、試みに現代の小説をどれでもよみから読んでごらん下さい。小説に使う文章で、他のいわゆる実用に役立たない文章はなく、実用に使う文章で、小説に役立たないものはないということが、じきおわかりになるのであります。次に小説の文章の例として志賀直哉氏の「城の崎にて」の一節を引用してみましよう。

自分のへやは二階で隣のない、わりに静かな座敷だった。読み書きに疲れるとよく縁のいすに出た。わきが玄関の屋根で、それが家へ接続する所が羽目になっている。その羽目の中にはちの巢があるらしい。虎斑の大きなふとったはちが、天気さえよければ、朝から暮れ近くまで毎日忙しそうに働いていた。はちは羽目のあわいからすり抜けて出ると、ひとまず玄関の屋根に降りた。そこで羽や触角を前足や後足でいねいに調べると、少し歩さまわるやつもあるが、すぐ細長い羽を両方へしっかりと張ってぶうんと飛び立つ。飛び立つと急に早くなって飛んで行く。植えこみのやつでの花がちょうど満開で、はちはそれに群がっていた。自分はいくつするとよくらんかんからはちの出入りをながめていた。

ある朝のこと、自分は一匹のはちが玄関の屋根で死んでいるのを見つけた。足は腹の下にちぢこまって、触角はだらしなく顔へたれさがってしまった。他のはちはいっこう冷淡だった。巢の出入りに忙しくそのわきをはいまわるが、全くこうでいるようすはなかった。忙しく立ち働いている

はちは、いかにも生きてゐるものという感じを與えた。そのわきに一匹、朝も晝も夕も、見るたびに一つ所に全く動かずに、うつ向きにころがっているのを見ると、それがまたいかにも死んだものという感じを與えるのだ。それは三日ほどそのまゝになつてゐた。それは見ていていかにも靜かな感じを與えた。さびしかった。他のはちがみな集にはいつてしまった日暮れ、冷たいかわらの上の一つ残った死がいのを見ることはさびしかった。しかしそれはいかにも靜かだった。

芥川龍之介  
(八五—一九  
三)小説家。  
俳人。短編  
小説に数多  
くの傑作を  
残してゐる。

故芥川龍之介氏は、この「城の崎にて」を志賀氏の作品中の最もすぐれたものの一つに数えていたが、こういう文章は、実用的でないということができましようか。こゝには温泉へ湯治に来てゐる八間が、宿の二階からはちの死がいの見えている氣持と、その死がいのようすが描かれてゐるすが、それが簡単なことばで、はっきりと表わされてゐます。ところで、こういうふうな簡単なことばで、めいりょうなものを描き出す技量が、実用の文章においても同様にたいせつなのであります。この文章の中には、何もむずかしいことばや言ひまわしは使つてない。ふつうにわれ／＼が日記をつけたり、手紙を書いたりするときと同じ文句、同じ言ひ方である。それでいてこの作者は、まことに細かいところまで写し取つてゐる。私が点を打つた部分を読むと、一匹のはちの動作をしっかりと観察してほんとうに見たとおりを書いてゐることがわかる。そうして、その書いてあることが、というのは、この場合には、はちの動作であります。それがはっきりと読者に傳わるのは、できるだけむだを切り捨てて、不必要なことばを省いてあるからであります。たとえば、終りの方の「それは見ていかにも靜かな感じを與えた。」の次に、いきなり「さびしかった。」と入れてありますが、「自分」というような主格をおかずに、たゞ「さびしかった。」とあるのが、よくきいてゐます。またその次の「他

のはちがみな集にはいつてしまった日暮れ、冷たいかわらの上の一つ残った死がいの見ることは、し  
かじか」のところも、ふつうなら、「日が暮れると、他のはちはみな集にはいつてしまつて、その死が  
いだけが冷たいかわらの上の一つ残つていたが、それを見ると、」というふうな書きそうなところだ  
が、こんなふうな短く引きしめ、しかも引きしめたためにいつそう印象がはっきりするように書けて  
ゐる。「華を去り実に就く」とはこういう書き方のことであつて、簡にして要を得てゐるのですから、  
このくらい実用的な文章はありません。されば、最も実用的に書くということが、すなわち藝術的の  
手腕を要するところなので、これがなか／＼容易にできるわざではないのであります。

たゞし、今の志賀氏の文章を見ると、「さびしかった。」ということばが二度、「靜かな」という形  
容詞が二度、くり返し使つてありますが、このくり返しは靜かさやさびしさを出すために有効な手段  
でありまして、けつしてむだではないのであります。こういう技巧こそ藝術的と言へますけれども、  
しかし、それとても、やはり実用の目的に背馳するものではありません。実用文においても、こうい  
う技巧があればあつた方がよいのであります。

実用実用と言ひますけれども、今日の実用文は、廣告・宣傳・通信・報道その他種々なるパンフレ  
ットなどに應用の範圍が廣く、それらは多少とも藝術的であることを必要とするのでありまして、用  
途のうえから言ひましても、だん／＼藝術と実用との区別がわからなくなつてきつゝあります。現に  
裁判所の調書などは、最も藝術に遠かるべき記録であります。犯罪の状況や時所についてずいぶん  
精密な筆を費やし、被告や原告の心理状態にまで立ち入つて述べておりました、ときには小説以上の  
感をもよおさしめることがあります。されば、文章の才を備へることは、今後いかなる職業において

も要求されるわけでありまして、かたゞ心得のためにこれだけのことをわきまえておいていただく方がよいと思います。

【学習の手引】

- (1) 文章の要は何にあるかを考えて話しあう。
- (2) 文章について、実用的であること、藝術的であることとの関係はどう書かれているかを話しあい、めいめいの意見を発表しあう。
- (3) 「文章について」に書かれている意見をもとにして、志賀直哉の「たき火」を研究する。
- (4) めい／＼の身のまわりのことに取材して、たとえば「風景」・「旅行」などの題でよい文を書いてみる。

六 新聞とラジオ

この課は、影山三郎の「新聞ができるまで」と、鈴木博の「放送とマイクロフォン」の二つの文から成り立っている。新聞とラジオは現代社会の重要な報道機関である。この二つの文を読んで、新聞とラジオのたいてい働きのよく考えよう。

一、新聞ができるまで

影山三郎

影山三郎は、明治四十四年（一九一一）東京で生まれた。朝日新聞記者。評論家。著書に中國翻譯戯曲

「雷雨」がある。

人間には「知りたい。」という心理と、「知らせたい。」という気持があります。新聞はこの二つの欲望から生まれたものです。ニュースと読者とを結びつけ、社会のさまざまの事実を読者の脳裏に再生させようというのが新聞の目的です。

世の中の新しい出来事に、人はまず、「いつ、だれが、どこで、何を、どうしたか。」という疑問を起します。そうして更に、その理由と、それがどうなったかという結果を知りたく思うものです。それが読者の立場です。これに対して、知らせたいという気持から、事実をありのまま、文章に表現するのが新聞記者の任務です。

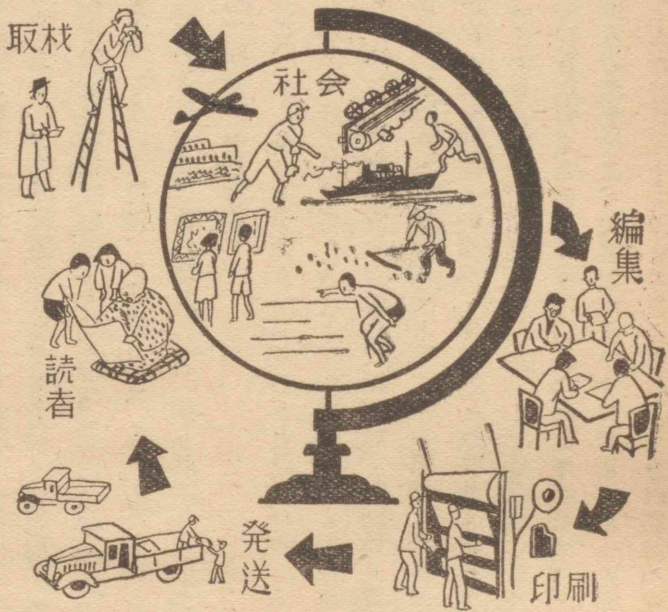
だから、多くの人々が知りたいだろうと思われるニュースを速く、そして正確に、記事や写真にして印刷し、読者の目に伝えることが新聞社のおもな仕事だといえます。

そのために、新聞社内の機構は、編集局・印刷局・業務局の三つに大別されています。また、編集局の中は、記事を書く取材部門と、記事を編集する整理部門とに分かれています。取材を受け持つ部門には、政治経済部・社会部・東亜部・欧米部・通信部・写真部・学藝部・運動部などがあります。

ニュースが印刷されるまでが、主として編集局の仕事であり、印刷された新聞が読者の手にわたるまでの発送販賣などの係りは業務局に属しています。

新聞社の活動には、完全な休止の時間がないといえます。それは、世界じゅうに、何も読者に知らせることがない、というようなことは考えられないからです。読者が眠っている間でも、新聞社の機

外電 略。外国電報の  
R P ラジオから  
ス電報から  
取材する外  
國通信社  
外信  
略。外国通信の



文字どおり晝夜を分かたずニュースが流れこんできます。

▽十時：外部の取材記者はそれらの持ち場で、もういろいろなニュースをキャッチしはじめています。重要なニュースのありそうな要所要所には、記者クラブが配置されています。新聞社から、

能はたえず活動を続けています。記者の目は読者の目の代わりとなつて、世界のニュースを警戒しているのです。  
それでは、新聞はどういうふうにして作られるのでしょうか。新聞ができるまでの新聞社の一日を、時計の針を追いながら、スケッチふうを描いてみましょう。  
▽九時：日本が夜の時、地球の向こう側は晝間です。欧米部には、既に特約の外電やR Pや共同通信社の外信が積み重ねられてあります。

外国のニュースのうち、中国・韓国・北鮮のニュースは東亞部へ、アメリカやヨーロッパその他各國のニュースは欧米部へはいります。時差の関係があるので

外へ飛び出した記者が本社と連絡を保つ必要から設けられた、各新聞社共用の仕事場です。

政治経済部では国会・首相官邸・各政党本部・諸官廳・経済団体・労働会館などのクラブを中心に、それら数名の記者が責任範囲を分担しあつてニュースに氣を配っています。また運動記者はスポーツ関係を、学藝記者は学校に関することや、科学・藝術方面のニュースを、更に、社会部の記者はそうした方面を含む社会のすみぐりにまで、取材活動の神経を鋭敏に働かせています。

予想しないところに、事件が突発したときには、新聞社で待機している内勤の取材記者が現場に駆けつけます。地震や火事や大水や、殺人事件のような場合には、お、ぜいの記者が特派されることもあります。

▽十一時：編集局長室で、各部の部長会議や次長会議が開かれます。さのうの記事や編集についての批判をしたり、さよらの予定について相談し、紙面を作るプランが練られます。

論説委員室では、社説というものは、ニュースの報道とは別に、ある問題に対する新聞社の意見を発開かれています。社説というのは、ニュースの報道とは別に、ある問題に対する新聞社の意見を発表し、その問題について読者とともに眞剣に考えようという氣持から書かれるものです。たとえば政治・経済・社会の問題、國際問題や文化問題、あるいは労働問題・農村問題というように、各問題に関し、日ごろから専門に研究している記者が、その時々的重要な問題をとらえて論じるのです。

▽十二時：全國各地のニュースが長距離電話で連絡部にはいります。速記者がせつせと鉛筆を走らせています。速記文字からふつうの文字にもどされると、それは通信部へ渡されます。

地方のニュースはいったんそれ、道府縣廳所在地の各支局でまとめられ、連絡部を通じて、通

デスク  
新聞社では  
一般に各部  
の次長のこ  
とをさす。

信部に送られて来るのです。連絡部では電信・電話・電送写真・はと便などの通信連絡のほか、名古屋・大阪・小倉・熊本をつなぐ専用電話で記事や情報や連絡事項をのべつに往復させています。

▽十三時：社会部や政経部のデスクにある数本の電話が、ひっきりなしに鳴り続けています。取材に出かけた記者が出先から、電話で原稿を送っているのです。記者クラブからは、オートバイで原稿が届けられます。

部長や次長の耳と口は、外勤記者との連絡や情報の交換で、電話にかゝりつきりです。目のまわりのような忙しさです。しかも、その目は静かに、原稿の一字一字を丹念に読み返しています。スピードが新聞の生命ではありませんが、急ぐと、とかくまちがいが起りやすいので、時間の許す限り慎重を期して何度もくり返して読むわけです。

取材各部の責任者が点検して、「これでよし」となった原稿は、整理部へまわされます。

こゝまでの仕事を取材部門といい、これから先が整理部門といって、いよいよ新聞の編集にとりかゝる段どりになります。

▽十四時：すべての記事と写真が一箇所に集まるころ、それが整理部です。世界のニュースは部長、次長によって取捨選択され、編集者にわたされます。整理部員のことを、取材記者に対して整理記者、または編集者といっています。

記事に見出しをつけ、活字や写真の大きさを指定し、記事の配置や紙面の構成を決めるのが整理部の役目です。たくさん集まった記事のうちで、どれがいちばん大きなニュースだろうか、読者が知りたいと思っっているのはどれだろうか、ニュースの価値判断や、いろ／＼さま／＼な記事や写

真を適当に整理します。そして新聞の、最後の仕上げにくふうをこらすのです。

▽十五時：原稿は整理部から、印刷工場へ送られます。文選係・植字係を経て、ゲラ刷になると、もう一度編集局にもどされ、校閲部で誤字や脱字が訂正されます。

文選というのは、原稿に使ってある活字を拾うことです。植字というのは拾った活字を原稿どおりに組むことです。

▽十六時：整理部で形や大きさを指定した写真や漫画、カットや地図は、写真製版室で、亜鉛版や凸版に造られます。

▽十七時：外電に使う人物写真や、解説を書く資料が調査部で捜し出されます。調査部には外国の新聞雑誌の切り抜きや、古今東西の書籍がたくさん保存されており、いざ必要なものがあると、索引カードですぐ見つけられるようなくみになっています。

▽十八時：締切時間が迫りました。整理部のデスクには、政経部から、社会部から、いよいよ原稿が殺到しています。

だが、新聞の紙面には決まったわくがあります。取材記者が苦心して書いた記事でも、短くするために、けずらなければなりません。ニュースがたくさんあるときには、まるっきり捨ててしまわなければならないこともあります。せっかく写して来た写真を何枚も捨ててしまうこともあります。

▽十九時：この時刻までに、同じ日付の新聞が一時間から二時間の間隔を置いて既に四、五種類印刷されています。重要なニュースがはいるたびに、版を新しく組み替え、一版、二版、三版……と早く刷り上がった新聞からつぎ／＼に汽車に積み込まれ、遠方の読者に送られます。各版の締切時

ゲラ刷  
組み版した  
もの木製  
の箱に移し  
て刷ったも  
の

亜鉛版・凸  
版

普通の印  
字は高くと  
り高いと  
ついでに  
キをつけて  
印刷する  
あるが、  
版は鉛板  
で製鉛  
の

間は各方面に行く列車の発車時刻によって決められてあります。地方に行く新聞には、別に編集された府縣版が載せられます。

組み活字  
活字を組  
で束ねた  
の活字組  
版ともい  
う。

▽二十時：…いよ／＼最終版を作る時間です。編集者が工場へ行きます。これをトップ、写真はこへ、その記事ははずして、その代わりにこの記事を入れよう…と、編集者が頭に描く紙面の構想は、組み活字をさばく活版部大組課員の手で、新聞一ページ大の四角なわくの中に組み立てられてゆきます。これを大組み作業といいます。

ローリング  
プレス機

▽二十一時：…大組みをローリングプレス機に入れて、紙型を造り、それに鉛を溶かし込んで、半四型の鉛版にして、輪轉機にかけます。輪轉機が回轉します。最後の、そしていちばん新しい新聞は発送部からトラックで各駅へ——新聞はできあがったのです。

取機式紙型  
用紙の大紙

▽二十二時：…油のじんだ作業服を着替えて、印刷の人たちが終電車に駆け込みます。

組みの紙を  
上に載せて  
圧力を加え  
る。

▽二十三時：…編集局・印刷局・業務局の宿直者がそれ／＼ベッドへ行きます。新聞の、きょうの仕事も、ようやく一段落つきました。

コールサイ  
ン

▽二十四時：…だが、ニュースに寝ずの番をしている人がいます。それは電話交換室の人です。深夜のコールサインを警戒するために、交代で徹夜です。いつ、どこから、どんな大事件の報告が飛びこんでくるかわからないからです。

リン  
と鳴る電話  
の呼び出し  
信号。

これまで書いてきたことは、新聞社としては、「たいしたことなかった。」と言えるごく静かな一日です。もしも重大なニュースがあればいると、全社内、けた／＼ましいベルが鳴ります。号外を発行す

るあいずです。秒針はあそらくまだ百八十度も回轉してはいないでしょう。が、整理部のまわりには既に印刷局からも業務局からも各現場の責任者が連絡に駆けつけています。号外発行のときには、新聞社は、ありったけの能力を発揮します。一秒でも速く、重大なニュースを、ひとりでも多くの読者に知らせたいからです。

新聞の仕事は、どうして、こんなにも忙しいのでしょうか。

それは、記者がニュースを知った瞬間から、読者がそれを知る瞬間までの間にある時間と空間を、なんとかして、少しでも縮めたいというのが新聞のいちばん大きな願望であるからです。

二、放送とマイクロフォン

鈴木 博

鈴木博は明治三十四年（一九〇二）神奈川県で生まれた。現在日本放送協会企画部において教養関係の放送を担当している。

にわたりの鳴く声に夜のとばりは開かれ、雨戸を繰る音、朝飯のしたくの水の音、小鳥のさえずる声に明かるい朝は訪れます。やがて職場へ急ぐくつの音、車の行きかう音、自動車の警笛、工場のサイレン、これに続く機械のうなり、こうして活動の世界は音とともに繰りひろげられるのであります。ひばりのさえずりには、春ののどけさが感ぜられますし、あぶらぜみの鳴きたてる声には、夏のやけつく太陽が思われます。秋の夜長を鳴きとす虫の声々、こがらしの吹きすさぶ音など、それ／＼



の音には必ずそれに伴うものを持っています。

音、おと、響、ひびき。

もしこの世にいつさいの音がなかったとしたら、どんなに寂しいことでしょうか。光のないやみの世界にも等しいに違いありません。

人間は、発達した発声器官に恵まれ、またこれに匹敵した聴覚器官を持っています。こゝにことが生まれ、ことばによって生活は高まり、ついに現在のような高い文化を築きあげることができたのであります。

一日のうち、筆を持たない日はあっても、一口も口をきかず、人の言うことに耳を傾けずに過ごすことはないでありましょう。このようにことばと生活、廣く音と生活とは固く結びついているものであります。

元來この音の実態は空氣の振動にほかなりません。太古以來、音は物体の振動によって起り、一分間に三百三十メートルの速度で四方にひろがり、やがて薄れて消えてしまうもので、その現象が終れば、ついに再び呼びもどすことはできません。しかもこの届く範囲には限度があります。いかに声を大きくしても、同時に千万人に呼びかけることはできないのであります。

音は、その場だけで消えてしまうという、時間的制約、また、ある距離より遠くなつては聞えないという空間的制約のあるものであります。

この二つの制約を克服するために、長い時間と、多くの努力が拂われたに違いありません。まず、ことばにおける時間的制約と、空間的限界を乗り越えるために文字が生まれました。これで、その場限りのものであった話しことばが、記録にとゞめられて長く保存できることになったし、遠く離れた人たちにも、思うことを筆に託して伝えることができるようになりました。その後、製紙の方法が進み、印刷術が発達するにつれてますます便利になりましたので、文字文化はひじょうに進歩してきました。

ところが、更に文化は進んで、話しことばはもとより、すべての音が、そのまゝの姿で保存できるようになり、必要に応じていつでも元の姿に再生して聞くことができるようになりました。すなわち録音することができるようになったのです。円盤に音波を刻みこんだり、明暗に姿を変えてフィルムに焼き付けたり、銅鉄線に磁性を持たせたりする方法です。これで、音はそのとき限りのものではなくなりました。更に電話が発明され、どんな遠い所にも音を運ぶことができるようになったのです。これで距離の限界も除かれたわけでありました。

マルコーニ  
(一八七一年  
三月)イタリ  
アの発明  
家。一九〇  
九年ノーベ  
ル科学賞を  
受けた。

マルコーニの無線電信の発明に続いて、一九〇六年、アメリカ人デリフォレストによる三極真空管の発明は、ついにラジオをこの世の中に登場させたのであります。これまさに音の世界の大革命であります。ひとりの話しことばによる呼びかけが、全日本を包み、更に全世界の人に話しかけることのできる時代がきたのであります。

自分の主義主張を、最も早く、最も多くの人に訴える手段として、新聞が高く評價されていたのですが、ラジオが登場するようになると、これにまさるものはなくなりました。直接この人の声とこと

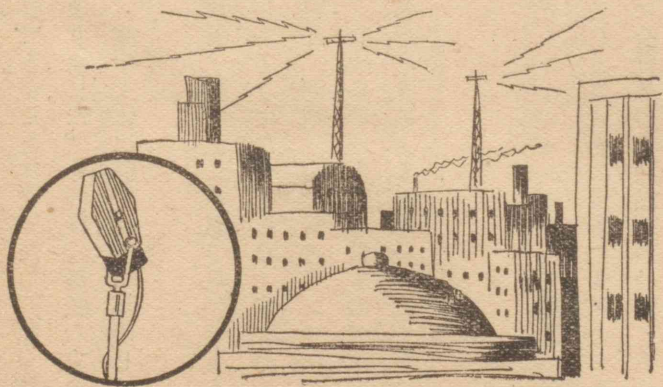
ばによって呼びかけるのですから、文章によるよりも、直接的であるし、感激的でもあります。そして電波は一秒間に地球を七まわり半もする超スピードで全世界を包括しています。

こうなると、話しことばの活躍舞台は一躍大きなものとなり、その威力が発揮されることになると、今まで文章に比べてとかく軽視されがちであった話しことばが、新しく考え直され、見直されることになりました。

一九二〇年、ワシントンの飛行場で軍楽隊の音楽を放送したのが、そも／＼世界の放送の最初であります。その後、この事業は急速に進歩し、世界各国に行われるようになり、放送技術は進み聴取率は日とともに高まってきたのであります。

わが日本では、大正十四年(一九二五年)の三月、東京放送局がまず設立され、芝浦の仮放送が開始されました。続いて大阪・名古屋に放送局が設けられたのです。東京は七月に芝浦から愛宕山に移って本放送を始めました。翌年の大正十五年(一九二六年)の八月に、東京・大阪・名古屋の放送局は解散して、新たに日本放送協会が設立されました。引き続いて熊本・札幌・仙台に中央放送局が設けられ、現在広島・松山の中央放送局があり、このほか

芝浦  
愛宕山  
いすれも東  
京都港区。



に三十七の放送局があるのです。

これらの放送局によって朝は早くから、夜は遅くまで、第一、第二の電波がほとんど連続して送り出されています。

電波は野を越え山を越え、いかなる山村僻地にも届きますし、大海原の荒波も、どんな大暴風もこれをさえぎることはできないのです。ラジオは全く空間を超越したもので、國境を乗り越え、だれにでも同じに呼びかけています。日本の空には、各國からの声が入り乱れているのです。どんな地域にいても、受信機にスイッチを入れ、ダイヤルを回せば、意のままに世界の声を聞くことができます。いながらにして世界の動静をつぶさに知ることができるし、美しい音楽を楽しみ、おもしろい劇を鑑賞することができるのです。

実にラジオこそ、最も大きな恩恵を人類にもたらした文化機関といえましょう。

このすぐれた文化機関であるラジオを、最も効果的に活用するには、まずよい放送をすることです。どんな番組を、どんな形式で、いかに巧みに演出するかにかゝっているわけです。

それも、すべての放送は、マイクロフォンが音を捕らえ、これが音声電流に変えることから始まるのです。したがってよい放送の根本は、マイクロフォンの巧みな駆使のしかたにかゝっているとはいえるわけです。

マイクロフォンは、人間の耳に感ずると同程度の周波数の音波に感ずるように作られたもので、上下左右どの方向の音にも同じように働くものもあれば、前面と後の面とが働くようにできたもの、一

方の面だけが音に感ずるようになってきているものなどがありますが、いずれも音に対しては人間の耳に匹敵するものではありません。

しかし、人間の耳にはいのちがありますが、マイクロフォンはいかに音に敏感であつても、人間の作った機械なのです。そこにこの両者の働きのうえに大きな違いが出てくるのです。

まず人間の耳は、多くの音の中から、必要なものを選び出して聞くことができます。やかましい電車の中でも、騒がしい工場の中でも結構話のできるのはそのためです。必要なものだけを選び出すということは、言い換えれば不必要な音は捨てることができるということです。柱時計のセコンドの音などは、たいていの場合捨てられている音であります。ときにはすぐ頭の上でポーンポーンと大きく鳴る音さえ聞きもせずことさえあるものです。

音を拾つたり、捨てたりする仕事は、耳だけでなく、目が大きな協力者となる場合が多いものです。海岸に立って、波の打ち寄せるのをながめながら聞く波の音は、そこに実在する音波そのものとは違ったものに感ずるのです。そこにある音波は、一つの波の音のほかに、右のものも、左にあるものも、あとに続く波の碎ける音も、すべてが重なりあつたものなのです。もし目をつぶって耳だけで聞いてみるか、闇夜に海岸に立って聞けば、目を働かせながら聞く波の音とどんなに違っているかに驚くほどでしょう。それに目は波だけを見ているのではなく、そのときの空模様から、目ざしのぐわい、更にそこには漁船が見えたり、かもめが飛んでいたりするかもしれません。こうしたことも、感ずる波の音に大きく影響するものです。

演壇に立って話す人の手がテーブルに触れたり、原稿をめぐつたりする音は、見ていけばほとんど氣にならないものです。人が歩いていけば足音が出ます。着物も摩擦して相当に音がするのですが、目の前にこれを見ていれば、それらの音はほとんど意識されない場合が多いものです。このような音は、かえって、視野の外にあるときの方が、音としての存在價值を發揮するもののようなのです。夜の路地に聞えるげたの音や、ふすま越しの衣きぬずれの音などはまさにそれでありませぬ。

機械の耳であるマイクロフォンは、こうした機能は持っていません。どんな音に対しても、より好みをすることなく忠実に受け取ってしまいます。そのために、マイクロフォンに向かったときは、必要のない音は絶対に出さない注意がたいせつとなります。

更に人間の耳は、左右の二つが一つに働くので、音の出た方向を探りあてることが出来ます。音には速度があり、途中の障害物によって強度に変化を生ずるわけで、こうしたことから一つの音が両耳にはいるとき、その状態のほんの少しの違いから、音の出た方向を知ることができるのです。マイクロフォンにはこの働きがありません。同時に二つでも三つでも働かすことはできても、音の方向を探りあてることができないのです。

このことは、映画におけるカメラが、一つ目であるために、人間の二つの目のように立体的に見えない悩みと同様であります。

マイクロフォンは、左右感を出ませんが、遠近を表わすことはできます。マイクロフォンに遠く離れば、反響を伴ってくることで、近くるときより弱くなることなどで距離感は相当表われてくるのです。

機械の耳は、人間の耳に遠く及ばないのでありますが、一面にはこの世の中のない音を作りだすこ

とができます。たとえば人間の声の中から高いところだけを通したり、反対に低い周波数のところを適当な範囲に捕らえたりするのです。この方法で、現実にはないゆがめた声を作りだして、夢の中の話や、心の中に思っていることをことばにする時に使ったり、静物や、動植物かものを言うとき使ったりして効果をあげることがあります。

放送を効果的にするには、まずこのようなマイクロフォンの性能をはつきり知ったうえで、これを生かしてしょうずに使いこなすことがたいせつです。そのためには、放送のスタジオが音楽的に研究されて作られなければならないのは当然のことですが、放送に適する取材をするためにも、放送の形式を考えるうえからも、放送台本を書くにも、演出をするにも、すべてはマイクロフォンの性能のうえにたつて考慮されなければならないのです。

マイクロフォンの巧みな活用が研究されくふうされることによって、新しい分野が開拓され、放送文化は高まってゆくのでありませう。

#### 【学習の手引】

- (1) 「新聞ができるまで」を読んで、新聞の任務について考え、話しあう。
- (2) 新聞社の機構と仕事を表にしてみる。
- (3) 静かな一日の新聞社の活動を、時間をもとにして、簡単な表にしてみる。
- (4) 重大なニュースがはいってきたときは、どうなるかについて話しあう。
- (5) 「放送とマイクロフォン」を読んで、ラジオの登場の意味を考え、話しあう。
- (6) ラジオはどんな恩恵を人類にもたらしたかを調べて、話しあう。
- (7) マイクロフォンの性能と効果的な放送について調べ、話しあう。
- (8) 新聞とラジオを比較し、その任務について話しあう。
- (9) 新聞を編集する。
- (10) 新聞原稿・ニュース・解説・シナリオなどを作つて発表する。また音楽放送のプログラムを作り、実演してみる。

## 七 自然とともに

この課は、荻原井泉水の「しみず」と、島崎藤村の「海へ」との二つの文から成り立っている。夏の山、夏の海は、私たちに何を語っているか、この二つの文から、大自然のことばを聞きとろう。

### 一、しみず

### 荻原井泉水

荻原井泉水、本名は藤吉。明治十七年（一八八四）東京で生まれた。俳人。新傾向の俳句を提唱した人。著書には、「井泉句集」・「旅人芭蕉」・「山水巡礼」・「新俳句提唱」・「此一筋を行く」その他句集・隨筆・評論集などたくさんある。

岩のくぼみにたゞえられているしみず、そこには象牙細工のような白い美しいかきが遊んでいたり

する。木の根からにじみ出るしみず、そこには草の葉が水滴のために、休むことなくかぶりを振って  
いたりする。

大島・三宅  
島・新島  
いすれも伊  
豆七島中の  
島。  
しだ  
別名うらじ  
ろ。日本・  
中国の山地  
に群生する  
針葉状の  
草。

私はかつて大島から三宅島通いの船に乗ったが、激しい西風に吹きたてられて、新島の本村へさえも船を寄せることができなかつた。小さなはしけでようやく新島のある浜へこぎ着けられた時は、ほんとうに漂流した者のようなたよりなさであつた。波音に沿うていながら、つばきの密林のために薄暗く、しだの茂みの中についている細い道に、私は船酔いのまだいえないふら／＼するからだを運んだ。のどはかわききつていたが、どうすることもできない。かるうじて二里ばかり来たころ、路傍に始めてしみずを見いだしたうれしさはたとえようがなかつた。そこにはお寺があつた。もう人里も近いとみえる。私はまったく救われたという気がした。

人穴村  
静岡縣富士  
郡の北部に  
ある村。

富士のすそ野を旅したとき、行けども行けども青い草原にきりぎりすがさびしうに鳴いているばかり。暑い日がじん／＼と照りわたって、日陰を作る木立さえもない。人にも会わない。鳥も鳴かない。そうした道に疲れきつたとき、ふと学生らしい旅人に会つた。「しみずのある所はありますか。」と私がこう言ったことばと、「人穴村までどのくらいありますか。」と向こうで問いかけたことばとが同時にぶつかつた。そこらは見わたす限りの平野で、大きな牧場にでもと思われるが、水というものが絶えてないために、生物を飼うことができないのであつた。しみずのない所には生命がない。私たちが汗をたらしながら旅をしているとき、生命の泉を求めような氣持でしみずを尋ねることがある。夏の野の旅をしたことのある人、または山に登つたことのある人で、しみずの味を知らない人はあるまい。しばらくたつてからその旅のことを思い起してみると、しみずのあつたあたりのことがいち

西行

(二六二)  
鎌倉時  
代の歌人

吉野山  
奈良縣にあ  
るさくらの  
名所。また  
歴史の遺跡  
として名  
高い。

「かのとく  
とくの」  
「芳野紀  
行」の一節

ばんあざやかな印象に残っているものである。人里を離れている所でも、路傍にしみずがあれば、たいてい一軒の人家があるものだ。大きな木をえぐつた水槽から、惜しげもなくさら／＼とこぼれる水が、不斷に生じて不斷に流れ去る「時」というものを思わせ、静かな障子を開いた家には、老婆かひとり糸車をわく／＼回しながら、毎日毎日同じような「時」を繰って飽かないでいる。そこを通る旅の者は、軒先のしみずを所望しながら、そこに住む人と何かことばをかわさなければいられない。または深い山の中で、人家などはもちろんなく、人の通ることもまれであるらしい所でも、ふと見いだされた路傍のしみずに立ち寄ってみると、だれか弁当をつかつたらしい飯粒がこぼれていたり、手すさびに摘んで来たらしい花がさしてあつたりする。いつかこゝを通つた人が、こゝで休んでいったのかと思うと、同じ道先へ行く者、あとから行く者のなつかしさも感じられる。

しみずというものは実に幽邃な境を思わせるものだが、それでいてまたふしぎに人間生活の親愛を感じさせるものである。

昔、西行が吉野山に隠れてしばのいおりをむすんだ時も、彼はなるべく人里から遠い所を選ぶとにも、またしみずのしたゝる所を選ばねばならなかつた。  
とくとくとあつる谷間のこけしみづ汲みほすほどまなき住まひかな  
とよんで、彼はこのしみずをもって命をさゝえていた。それから五百年の後、芭蕉がそこにたずねて来たときには、西行のいおりは朽ちていたが、そのしみずはこけにも隠されずにあつた。「かのとくとくのしみづは昔にかはらずと見えて、今もとくとくと雫落ちける。」と彼は感激の心をしるしている。芭蕉は西行の歩んだ人生を慕って、自分もまたその道を歩こうとしていた。その道はきわめてかすか

な、ほんとうの隠者のみが行く険しい道である。しかも、先人の足跡は「時」の力をもって湮滅せられることがないという真実を、芭蕉はこのしみずの、昔に変わらざわいてしたゝっていることをもって実証しえたのであった。

下野國  
栃木縣の古  
称。

下野國しもつづ蘆野あしのという所に、「しみずながるるのやなぎ」というのがある。私が持っている昔の旅行案内には、やなぎの下に水が流れている小さい図がはいっている。西行がこゝに來たときであろうか、

蘆野  
栃木縣那須  
郡にある

道のべにしみずながるるやなぎかげしばしとてこそ立ちどまりつれ

とよんだという。芭蕉はその傳説を聞いてなつかしくは思っていたが、奥の細道の旅のときにそこを通りかゝって、「こゝの郡守戸部某むにかしの、このやなぎ見せばやなど折々にたまひ聞え給ふを、いづくのほどにやと思ひしを、けふこのやなぎのかげにこそ立ちより侍りつれ。」と、彼はその喜びを筆にしている。西行も芭蕉も一生を旅にすごした人々である。彼らは自分の先に行つた人が、いかに行路に苦しみ、そしていかにこのしみずのほとりで喜びを見いだしたかを実によく知っていたに違いない。

(雑誌「女性線」による)

奥の細道の  
旅  
元祿二年に  
奥州紀行を  
くわだてた  
奥州紀行を  
いう。一、奥  
の細道は奥  
州紀行とい  
い。その紀行  
文として名高  
い。

二、海へ

島崎 藤村

島崎藤村、本名は春樹はるき。明治五年(一八七二)長野縣で生まれ、昭和十八年(一九四三)になくなった。

詩人。小説家。文壇の權威として長く活躍を続けた。著書には「藤村詩集」・「千曲川ちまがわのスケッチ」・「破戒」。

「嵐」・「夜明け前」などたくさんあり、「藤村文庫」に全部収められている。

コロンボ  
インドのセ  
イロン島の  
主都。

船はインドの南端を過ぎた。ときとすると驟雨しゅううがインド洋へきた。それはわれ／＼の甲板へ吹き込んだ。合奏のような海の音も聞えた。雨後はことにむし暑い。白い熱を帯びた雲が行く手の空に起つてそこにあるものは永遠の眞夏かと疑わせた。コロンボの近海に見て行つた漁船の影も隠れた。

ふと波の間に一そうの汽船が見えた。われ／＼の甲板からその汽船を認めたものは、いづれもてすりの所に立ってながめた。

「あ、日本の船じゃないか。」

と私は自分で自分に言つてみた。——その二本の帆柱で、その一本の煙筒で、われ／＼の乗船に比べるとおのずから構造を異にしたその黒い船の形で。

マルセーユ  
地中海沿岸  
にある最大の  
貿易港。パ  
リに次ぐ  
大都市。  
エルネスト  
シモン

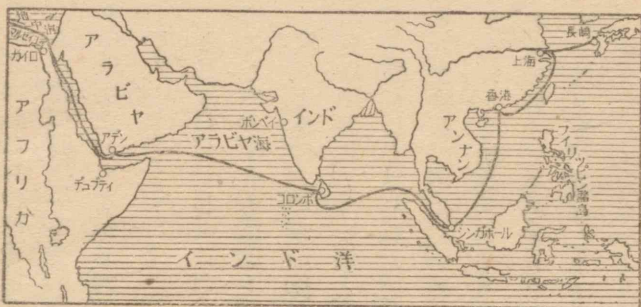
私はともの方の太い綱の積んである甲板の上へ走つて行つた。そこから船をのぞもうとした。神戸出発以來われ／＼の船と前後してマルセーユへ向かう郵船会社の汽船があつたから、波間に見るのもその船らしく思われた。貨物を積むことのわりあいに少なくて速力の多く出るエルネストシモンは見るまにその船に追い着いた。遠く離れて來た自分の國を一つの船にして見せてくれるようなその形があたかも絵巻物のようにして私の目の前にあつた。私は青く光る波を隔てて、向こうの甲板に集まる人の影までものぞむことができた。はたしてそれが同胞であるや否やを見定めることはできなかつたけれども、私はしきりに自分の帽子を振つてみた。

作者が乗つ  
ている船の  
形体上の名  
稱。

まもなくエルネストシモンはその船を後方に残して進んで行つた。遠く／＼後方に残して。海はまた砂漠ばつのような空虚に返つた。鳥一羽、船一そう、何一つ私の目にはいるものはなかった。われわれの船がシンガポールを離れたころはまたそれほどにも思わなかつたが、いよ／＼インドの南端も過

シンガポ  
ル イギリス海  
峽植民地  
の都で東南  
アジア最大  
の商業地。

サイゴン  
印度支那半  
島の首府。



ぎ、コロンボもはや後方になったとき、なんとなく私も心寂しさを感じてきた。故國の消息が絶えてから既に二十二日であった。

船はアラビアの海へはいつて行った。そこには油を流したような海があった。どろりとした青い波は幾種幾様かのうず巻きと、しわと、紋とを描いて見せた。白い雲の影は海に映るほどの目で、その静かさは熱帯らしい静かさであった。どうかすると海は、へびの膚となめらかさを見せた。私はまた波の間に群れ飛ぶ銀色の飛魚をも見て行った。いまだかつてのぞんだこともないような夕日に燃える火の海をも見て行った。

夕風の美しさに、大船の甲板では皆思いつく集まって、涼み話を持ち寄っていた。私はサイゴンから同室するようになったオペラの歌うたいのそばに腰掛けた。この歌うたいは夫婦とも船に弱くて、少し波のある日などはふたりともよく青ざめた顔をしていた。そのたびに私が介抱してやったりなどした。

「失礼ですが、私はMという者です。コロンボからこの船に乗ってまいりました者です。」

と、そのとき私のそばへ来て、名刺をくれた日本の絹商があった。こんな外国人ばかりの中で、珍しい同胞に会えて、國のことばで話ができようとは、まったく私も思いがけないことであつた。M君は商用でボンベイからインドの地方を旅して、これからロンドンの方へ向

かうという人であつた。私をフランス船に見つけたことはM君にとつても意外であつたらしい。

ボンベイ  
インドのボ  
ンベイ縣の  
首府。イン  
ド最大の都  
市。

るのが涼しく見えるような海を、日光の激しい日はまた波からくる青い／＼反射がまぶしく目を射るような海を。  
私は多くの時を上甲板の方に陣取つたM君のそばで送つた。朝の甲板の水そうじが済んで、まだ板の間がぬれているころには、私も素足でひや／＼と目のさめるような心持を楽しみながら、そこへ朝着のまゝで歩きまわりに来る隠居ともいっしよに海をながめた。

日の光はアラビアの海に満ちていた。人を避けて私は海を見に行った。いっさいを忘れさせるものは海だ。踊れ。踊れ。海よ、踊れ。ふなばたに近く白い大きな花輪を見るようなのは、われ／＼の船から起す波の泡であつた。たちまちその泡が近い波の上へひろがっていつて、星のように散り乱れて、やがてあとかたもなく消えていつた。私は遠く青く光る海のかなたに、無数の魚の群れかとも思われる波の動揺をも認めた。條理もなく、筋道もない海。先蹤もなく、標柱もない海。豊富で、しかも捕らえることのできないような海。どこを出発点とも、どこを結末とも言いがたいような海。私の目に映るものはたゞ日の光であつた。波の背に反射する影であつた。あい色の波の上に浮き上がつて、やがて消えてゆく泡であつた。波と波とあい打つとき／＼上がる水煙りであつた。光と、熱と、波とはほとんど一つに溶けあつて、私は自分のからだまでその中へ吸われてゆく思いをした。

大船の心安さ。私は波打ちぎわの砂の上に身を置くような海から離れた心持をもつて、しかも岸からうかうかこのできない海のふところをまのあたりに近く見て行った。巻きつゝある。開きつゝあ

る。わきつゝある。起りつゝある。走りつゝある。放ちつゝある。延びつゝある。狂いつゝある。乱れつゝある。競いつゝある。あふれつゝある。かもしつゝある。流れつゝある。とゞまりつゝある。まろびつゝある。陥りつゝある。うず巻きつゝある。波は波の中にすべり入りつゝある。揺れつゝある。震えつゝある。触れつゝある。打ちあいつゝある。まじりあいつゝある。さかだちつゝある。連なりつゝある。続きつゝある。われとわが身をほしいまゝにしつゝある。長い廊下のような甲板からながめると、少し斜になつたてすりの線があたかも遠い水平線とすれ／＼に合つて、あるいは水平線の方が高くなつたり、あるいははてすりの線の方が高くなつたりするように見えた。どうかすると、青い深い海はその板の間まではい上がつて来るようにも見えた——波の動搖に身を任せていた私のすぐ足もとまで。

赤黒いはげ山をのぞむような、ところどころに石の質の現われた、荒寥<sup>ワカシ</sup>としてしかもかわききつた「死の島」ともよんでみたい幾つかの島の影が海の上に現われた。われ／＼の船では乗客は皆甲板の上総立ちに立った。さっそく双眼鏡を取り出した者もあつた。「アフリカが見えてきましたぜ。」とそばに立つM君が私に言った。

まったく知らない人たちの中にはいつてきた私も、どうやらこうやらアフリカの海岸に近い所までこぎ着けることができた。航海の季節によってはなか／＼骨がおれると聞くアラビアの海をも、さほど暑苦しい思いもせずに通過して來た旅の幸を祝つた。ジュブティへ石炭を積み寄るといふ前の晩港のうちには、水に映る燈火の影も少なかった。その夜の十二時ごろにわれ／＼の船はこの石炭の産地を離れて行つた。

ジュブティは、船では盛んな晩餐<sup>ばんさん</sup>があつた。われ／＼の食堂も港ごとに客の数を増して、ジュブティに着くころには五十人を越していた。皆互にコップを上げ、カチリと触れあわせ、航海の無事を祝うためにフランスのぶどう酒を飲んだ。

一方にアフリカ、一方に小アジア、その二つの陸の間を進んで行つて夜が明けたころは水蒸氣が多かつた。その日は午後からことにひえ／＼とした。子どもを連れた母親たちは幼い者のために薄い肩掛けを取り出すほどの陽氣であつた。紅海の一日はこんなふうになつて涼しくもあつたが、また身の置き所もないような、暑熱の耐えがたい日もきた。私は風のない海の上に遠く光る川のような波の反射をのぞんで行つた。動搖して定まりのない波の丘、波の谷、波の小山をものぞんで行つた。波と波のさゝやきをも聞いて行つた。急に涼しい風が満ちて、しかも平らかに穏やかな海をも見て行つた。

一日は一日より涼しくなつていった。スエズもしだいに近づいたところでは、急に外套<sup>まがひ</sup>を取り出して夏服の上に重ねる者すらあつた。氣の早い隠居はマルセーユの港に着いたときの下相談などを始めて見物・宿泊それから食事の連中に加わることと私のところまで勧誘に來た。こんな場合にいつでも私に注意を與えてくれるのはドクトルであつた。

さみしい一軒屋のような燈台が見えてきた。紅海の領分もようやく狭く盡きてきた。エジプトの岸の方を見ると白く黄ばんだ日当たりの中に小さな村落らしい人家をものぞんだ。そのあたりには樹木も何もなかつた。もうスエズも近づいた。

スエズは紅海の西北部にあり、地中海の東にあり、エジプトの運河が通じている。



海はほちえんだ。明かるい海があった。柔らかい海があった。少し黄ばんで、しかも底青く透き通るような、泳いでもみたい海があった。長い船旅の疲労を身に感じながら、日に焼け、潮風に吹かれ続けていって、國を出た日から数えると三十一日めでようやく私はスエズの港にたどり着いた。

私も遠く来た。いまさらのように私は國との隔たりを胸に浮かべた。あの浅草新片町の住み慣れた小楼の方に比べると、私の行く先々には実に想像も及ばぬようなまったり別の天地があった。私は旅を思いたった。出かけて来た。そして人ひとり動くというのは、なか／＼容易でないということを思い知った。

〔海へ〕による

【学習の手引】

- (1) 井泉水の「しみず」を読んで、しみずが人間生活に親しみを感じさせる例を話しあう。
- (2) 次の問に答える。
  - イ、「とくとくとおつる谷間のこけしみづ汲みほすほどもなき住まひかな」はどういう意味か。
  - ロ、「道のべにしみづながるるやなぎかげしはしとてこそ立ちどまりつれ」はどういう意味か。
- (3) 藤村の「海へ」を読み、この文のナジを短いことばで言ってみる。
- (4) この旅行を、地名をもとにして表にしてみる。
- (5) 「海へ」の読後感を話しあう。
- (6) この二つの文をもとにして、大自然と人間との関係について、いろ／＼と話しあう。
- (7) たとえば「山の思い出」・「海の思い出」などの題で、このような文を書いて発表する。

Approved by Ministry of Education  
(Date Oct. 24, 1949)

教育文化研究会

國語科編集委員

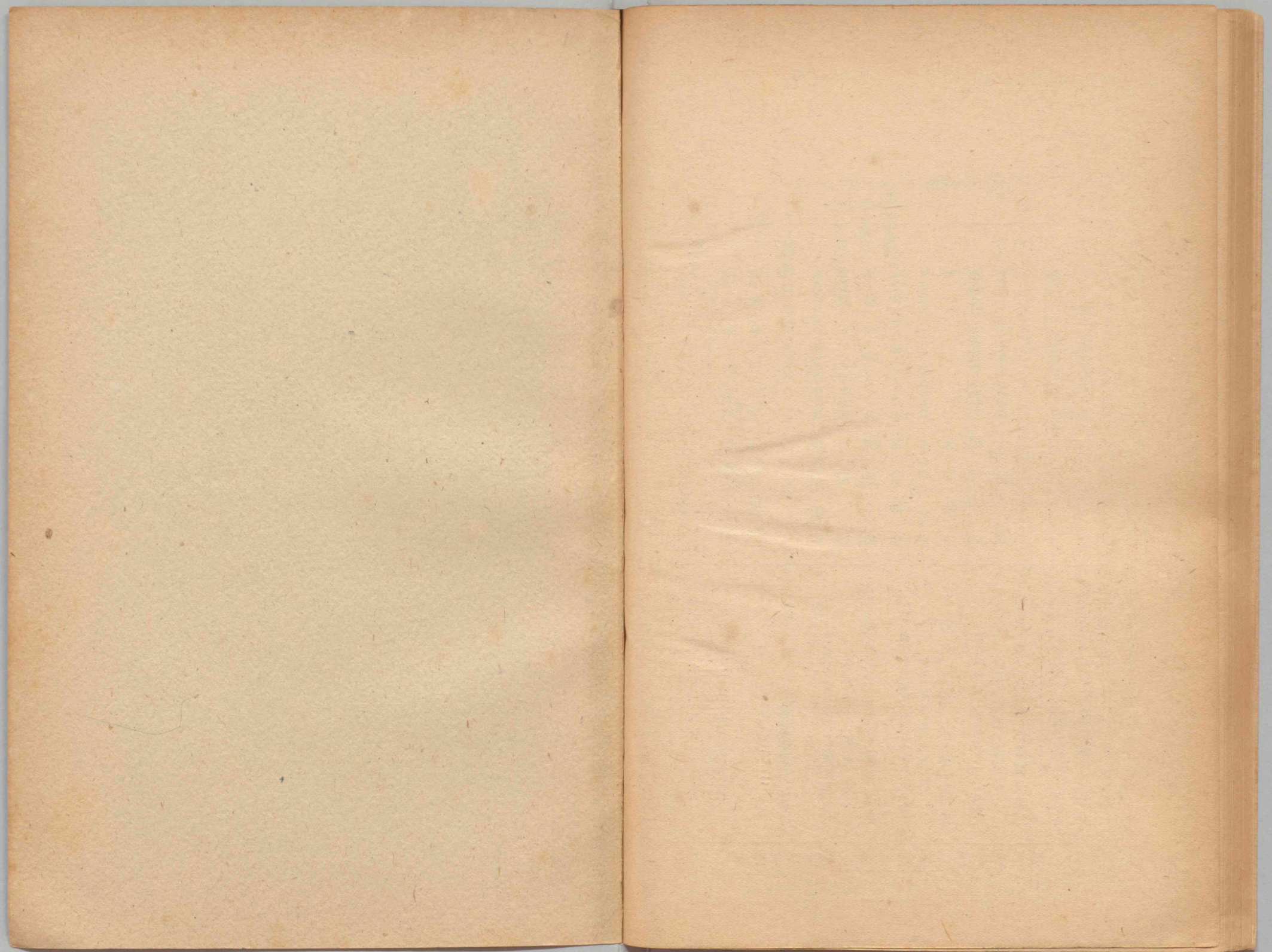
会長 國立國會図書館長	金森徳次郎
主幹 東京教育大学教授	石山脩平
東京教育大学附属中学校教諭	長谷川敏正
東京都立第一女子高等学校教授	渡辺茂
成蹊大学教授	飛田隆
東京都立第十高等学校教諭	鳥山榛名
東京教育大学附属高等学校教諭	和田邦五郎
同	宮崎健三
お茶の水女子大学附属高等学校教諭	稲村テイ
東京都目黒区立目黒第八中学校教諭	大村浜

一、出版権設定登録済  
 二、意匠登録出願中  
 三、無断転載を禁ず

昭和二十四年七月十五日 発行  
 昭和二十四年十二月二十一日 再版印刷  
 昭和二十四年十二月二十五日 再版発行

【國語】中学二年(一)  
 定價金十五円九十銭

東京都新宿区市谷砂土原町一三番地  
 教育文化研究会  
 著者 代表者 金森徳次郎  
 東京都新宿区市谷砂土原町一三番地  
 教育図書株式会社  
 発行者 代表者 小松謙助  
 東京都新宿区市谷加賀町一ノ二番地  
 大日本印刷株式会社  
 印刷者 代表者 佐久間長吉郎  
 東京都新宿区市谷砂土原町一三番地  
 発行所 教育図書株式会社



広島大学図書

0130449691

